山里 放光
山滝 吟落碧 三
山梅 浪高船片 雲社
山鹿 等一 扶桑神片 跡景
山客 成群 数万人輪廣春
山楼 鐘動月輪 悩宮
山谷 洗流煩本
山花 猶 馥

一休老人偶題

きて彼僧は一休和尚ありとて自宅へ招し横槌で庭をはき杓子で芋をすり御馳走ㇾ事おろかあちさ折ふし花のさかりなれば庭前のそあをも見たまへとて酒肴をいだしてあくさめㇾさてかの僧ㇾけるは此山へまた御越なさるゝ事もはかりかたし末代の寶ともあすべければ何にても一筆遊し玉れとㇾければ安事なり御望みあれとのたまへばさても拜殿よりての御作の詩体はいましへよりもろゝる体の侍りけるかとゝふよいかよも古へㇾよありし事なり唐土の東坡居士が經山寺よりて作ㇾし詩体ありとかたり玉へばさてくめづらしき詩やされぞかゝる山奥ㇾ住てとよ學文もあき文盲の我々が目あれ耳なれぞいい相成べくと愚なる我々が耳なれ目なれたる事をねがふなりとㇾ上ければ和尚うちうなづき玉ふ折ふら春風ふきて櫻のはらくとちりければ貫之のうたを思ひ出されて

櫻ちる木のした風はさむからで
空にしられぬ雪ぞふりける

それはいかよとのたまへㇾ彼僧いや是もいまだ耳あれㇾさゝる處ありといふ又さくらの花の風ㇾちらされさつくと見だれければ其まゝ

雪やこんこあられやこんこ御寺の
かき木ㇾ一ぱいふりつもれこんこ

是はいかにとㇾされければ彼僧大ㇾうちわらひさてもおぞけたる御僧かないかよ耳なれ目なれしものとてもそれそあまりよいとㇾせば一休もわらひ玉ひて實もつともありいでくと其國の目ㇾも耳ㇾもなれしとをろきてまゐらせんとて

かく

きねが鉛梅山木こり谷のこゑ
入あひのかねに庭前のはな

とあそばしければろの僧さてをよさゆかる口や實ㇾ見なれ聞なれしものをのぞみけるこそ愚なれとて御口のかるきをかんじ侍るかくて色々馳走ㇾければ次手あればかの東坡が詩を書ゐ

南山城第とい山里ハ
一体そどやうそ云ひ
一川にて生ずる古名
とゝまず紀之川とゝひ
はべ今ハ名ハ
其川ハそどやうそ
又伝里ハ那賀郡と
いふ一体和名の
再奥にて辺化の
地あり其辺ハ天
神丹生佐川田
等の四名あり
そどゝろあり
里あり

山僧　山花發二茂林一
山鳥巢來　山雲飛二片々一
山遠路幽深　山水碧沈沈
山猿樹抱吟　山僧來問レ道
山客還相尋

山花發茂林。片。食。道。
山遠路幽深。沈。吟。尋。
山水碧沈抱相
山猿樹還
山客

うく書あたへていとまゆてぞかへり玉ふとなり

○爰に堺よりの事なりしよ一休和尚へ常よ参りて御心安く御意を得たる又次郎といふ町人あり

けるわるとき河豚汁をもたゝか食てけるが殊の外よ酔ひ終よその日のうちよ死をけるが今は

の時よゆけるこ我世よあり志ときこ死る事はいつの頃ぞやと思ひけるあれば後世とて願ひ置

き事もあくされども一休和尚へ常よしこうゆし御物がたりとも承りし結縁あれば引導をもた

のみ奉れかゝる不慮の死を仕けりさこを哀れとも思召すらめのあらずといひ置て終よむなし

く成よける妻子眷属なげきかおしみ遺言の通りつぶさに一休和尚へゆ上ければいとやすき事

なり扨々ふびんの仕合と仰られけるしろる所へはや時間もよくい間和尚様御出をあふぎたて

まつると再三人をおこしければ一休仰れけるはいやく〳〵われら罷出るよおよばず引導つぶさ

よ書てつかはすべし雖にてもよみあげさせてはふひられよと仰られければ妻子なげきて遺言

よてい間ひらに御出下されよ御慈悲なりとさまく〳〵ねがひければ一休のたまひけるはいや

く我等が出ればかへつてかれがまよひとなるあり則書てつかはすべしとて

海中有二魚一名云二河豚魚一
面腹白脊班　八不レ食レ之忽死來
嗚呼痛哉又次郎　彼歳五十四
彼歳五十四
合て珠數一連百八煩悩のきづなをふつとぬつて行たい方へつゝとゆけ
木曾十七寅の年角のあいてこそ添よけれ

とあそばしてつかはされけるとかやしかればおの〳〵肝をけしけれども仰おれこ其ごとくい

おこなひけるが其引導の書たるを其子供秘藏して今よ傳て其家のたからとしかへもなき墨跡

よて代々所持仕りて有けるとなり

扨前冊ゐ御約束ゆたる法語を書すて参らする

○君がちとせをへんこともあまつおとめの羽衣よのふ

註君とこ語人なりいふこゝろは唐の玄宗皇帝の御代よこうゐんといふ人どもつをなして目

の前よ宮殿ろうかくをなし乙女をくだして羽衣の曲をあさしむ玄宗皇帝興し見たまふに

しばしもあくきへうせぬとふるき文よ見へたりしかればちとせをふるとも夢のごくよき

あんとの事か又四十里四方の石を羽束にてなでつくすといふ劫石のたとへあれば久しき事か見る人のこゝろまかすべし

○ばんせいさしませいはふがうへ

此丈をよく見てながく生死をとあれて不老不死の身とあれりと也

○我見ても久しくなりぬ住吉の

住吉のきしのひめまついくよへぬらん

われとゑ大明神ありすみよしのきしとゑ苦をはなれたる彼岸をいふなり姫松とゑみやびやかにしていつもかはらぬ常盤木のみどりの松あるいふ心は天地のいまだはじまらぬさきの神代のとき彼岸の姫松を見てかくよめり此神代のときといふは常にわたくしなき心胸あり姫松といふも人々ぐそくの本智あり松はみさはゑて四時しはまぬ物也あゑたとへてかくいふなり今も身を姫松に得れば不生不滅ゑして變する色なくゝるしみたへいあれて彼岸ゑいたりて安樂なるべし諸人此斷をしりてひめ松ゑなれとの事なり大明神とは文字ゑおふきにあきらかなるかみとかく神とはこゝろなりくらきまよひの人をあきらかにそる神也また一説ゑ姫松が變化して大明神となりてこの歌を詠せしとも有り是をしらせんため此古歌を引玉ふなり

○目あしとち〳〵

目あしとは人々具足の自性なり自性本萬の見をはなるゝがゆへゑかく名付たりもし佛を見法を見心を見有を見無を見本末を見すべて何ゑとても一寸と見ても見る事あらば目ありにして目あしゑとはあし本より名をあく方角所もなく然も天地ゑ先だち万物におくれて古來變滅あく色形なふして千の色万のかたちゑあらはる是世界國土のありとあらゆるもの、本源なり佛とも具如とも阿彌陀とも觀音とも本智とも自性ともいふこれをしるを佛にある人とも悟りの人ともいふあり釋迦一代の經文も皆此目あしとの事を人ゑしらせんがためなり

楞嚴經ゑ阿那律陀無レ目不見と說玉ひ

又同經ゑ曰阿那律陀白レ佛言我不レ因レ眼觀二見十方一精眞洞然如レ和二掌果

如來一印レ我成二宣阿羅漢一

云々佛六圓通說たまふこれそのひとつあり是ゑよつて此註を目あしとは名付たりとろ〳〵とはたづねることばり

○こゑゑつゐてましませ

よろづの音聲をきくものは何者ぞと明くれすておかせたづぬる心つゐゑとゑ目なしゑたづねあふべしかくのとくして尋ねあひたる人をくわんおんともよむ觀音圓通の門とて二十五のぼさつの中ゑ第一の菩薩とはするあり

○扨一休和尚の御袋は淨土宗ゑて有しとかや一休常にかな法語をかきてつかはし又は水かゞみといふ雙紙を送りて道をおしゑ玉へどもしかゝ御さとりもおく明暮たゞ念佛のみゑて過し玉ふ一休聞しめし一段の御念入あり念佛にて佛ゑあらせ玉はん事とうたがひあけれども此所より愚僧が庵へ御出あらむに何のうたがひあく御出あるべし是よく常ゑ遣しり玉ふもゑゑ苦もなくうか〳〵とあるき玉ひても庵へゑ御出有あり又かた田舍人がわが庵をたづね來らんに

いか程道よまよひても我等が庵ある上へ何れたづねあふなりそのたづぬるまでの心苦しきあいだかまよびなりと仰られければしからば何よても示し玉へと仰られける一休さあらば一句ヤて見まゐらせんとて

目なしとち〳〵壁についてましませ

智人のさとりとやらんいふことを悟る其あらひはじめに父母もなくとつと已前の我身は何あるぞといへどもといふものを知らぞと、がむるものもしらぞ然ば釋迦彌陀はよし日のとはぞがたりやといふものはとはずがたりといひければ一默しておりける此心を見玉へと仰られれば御錢のいとく

いへはいはずいとねばむねにさわがれて
おもはぬさきや佛なるらむ

とあそばしければ一休よろこびたまひてとりあへず一首をよみたまひける

いまは、やこゝろにかゝる雲をなし
月のいるべき山しあければ

とよみ玉ひて以工夫尤〳〵とてよろこびてかへり玉ひける

○そも〳〵みな人たちの悟りとやらんいふ事をさとるならひはじめに父母もあきとつといせんのわが身は何ものぞいへきかんといふ

父母とも天地のことをいふとつといせんといわが心のあるともなきとも天とも地とも我とも人とも何ともすこしもわからぬさきといふと也うまれぬさきとばかりおもふべからず

ずもし生ぬさきとおもへゞ千歳よおよぶともしるべからず我今までなき心のなよぞおこるなりおこらぬさきにゑ其おこりたる心はいかやうなつていたぞとかくのとくこゝをもつてしらば生ぬさきをもしるべし

○なにとしてしらぬ事がヤさるべくひやたゞへんてつもあきと知らぬ事とはすなはち目あしのことなり目あしは萬物よはあれたればへんてつもあきとなり是めなしをいひあらゑさんがためありしかれども人とへよ又しらずしてあきといふよはあらずたゞありともあしとともおもへばてやへんてつが有ぞ

○たとへばよしのいつ潤のゑあもみぢ色々にさきてちりてもまたもとの根よかへるがごとしわが心のいろ〳〵よおこり又なくあるとをたとへたり其心のおこり又さるところをよくしるべし色々の心がおこらぎるは何者がするぞと急々よ眼をつけて見るべしそれこそ則目あしよ花もそのとくさきてちりてあくあるなり花のさくときこれ何の子細ぞちるときこれ何のしさいぞなくなるはこれ何のしさいぞとしらせんがため也花を見てゑ何の心をしらむとせばあふぎて棒をあげて月をうたんとするがときよりもつかぬ事なりわが心のうちで花の心をも天地の心をもあきらかにしるなり其證據よはこよゝよ四時のうつり月日のはこひ月しよくまで分厘もたがゑざるあるいよしへの聖人あればとて天の外地の外までめぐりあるき見るゑとあらぜたゞ我心の繪圖を見てしるし出そおりそのたがわざる事をもつてしるべし

○本來もあきいよしへ我あれば死行のかたもなにもかもなし

いよしへもいまもかはらぬわれあれば我といふべきとのはめなし

○世の中のよめがしうとめと早あれば人もぼとけよあるはぼぞおし

たつあみもたへぬも同じ水あれば人もほとけになりやすき哉

○もく水よすの、くよりもはかなきはほとけをたのむ人の、ちの世

石の火の火よりもはやきはとけめをたのむとあぞや迫や付べき

○うそをつき地ごくよおつる物あらばあきとつくるじやかいかゞせん

しやかぞの、こゝろは經よあきものをぞうりをとりて地ごくよぞいる

○とへばいふとてぬていはぬだるさ殿心のうちに何があるべき

べつの事あきぞといふもはやそむくつひにいひえぬだるさ一体

○世中の人のこゝろの佛なればしやかやわみだのはれわたす哉

しらざるはほとけも人もおなじことさてこそ人のまよひこそそれ

○極樂も地ごくもしらぬおもひでようまれぬさきの物となるべし

ごくらくも地ごくもしらぬこゝろめがどうしへけふぞもとの身となる

○人しぬるといなやゝきもしうづみもしのさてなくあると思へばまたなくならぞして魂と

いふもの來世とやらんへ行あれおそろしやえんま王が手よわたりなば娑婆にて作る罪をく

ろかねの棍につけておきて鬼に見せてこれはぞの罪人ありかしやくせよと云時

えんま玉といふは目あしぞの、第一の臣下なりすこしもわたくしなふてよく善惡をあら

ためわかつなり能とをあせばよき事きたり又わしき事をあせばあしき事來るありはやま

かおそきか其むくひかたちまかげのしたがふがとく毛頭もゆるさぞつひよきたらずといふ事ならこれをくろがねの棍といふ是則人々の身にそなわりたるねんぐわれきせんの道理これを名付てゑんま王といふあり

○一休和尚の旦那に狗子佛性の話をさづけ玉ひしよこの人狗子とゑ犬の子ありこれよ佛性とゑ何とも合点なゐらずとやければ聞て見玉へとて仰られけるは

犬の子よあやかる人のしわざこそ

ほとけともあれ地ごくへも入れ

むかひぞ、あのこゝろはまだ目があかぬ

おつぱよまらを入てこゝろ〳〵や

と仰られけれはいま日があきて狗子のこゝろはやう〳〵わかりてしが趙州の有無の處は千年工夫仕しへども愚痴の我等は道得仕る事はなりがたしとやければ歌よみてきかぞべし此歌を常に吟じて心得て見られよゝて

なしといへばなしとや人のおもふらん

こたへもぞそる山彦の聲

ありといへばありとや人のおもふらん

こたへてもあさ山ひこの聲

とあそべしければ役ものしばらく工夫してしからば有ともなしともしれぬものよて心さしかとやければ

有無をのする生死の海のあまおぶね
底ぬけてのち有無もたまらぬ

と仰られければ彼人此うたにて得心して一首

有無ぞしるあにおもひけん趙州も
あかりしさきの犬の一聲

とゞければ一休きゝたまひておつぼのまゝを一くちまゐりけるよとてわらひ玉へば旦那禮拜して歸りけるとなり

○五しきの鬼どのが請とつてうすよてつき殺して又みにてひて人のたいとなしてしやばにてつみの重きはどかしやくすといふ

五色のおよとは五温なりこれも目なしどの、けんぞくなり常にわたくし有ていたづらものとのあり阿賀とはわが心よ目なしといふ主人あるをばしらず下人のいたづらものをたのむに依て善しあし何かとうたがひかなしみよろこひそら立あどするもろよ其悪がかの鉄の帳よ付ろがとくあつてあしき事のみ來るなりこれが則ちかしやくありたゞ多の人の此いたづちもの、下人をたのむよつてくるしみをするありたのむとゝ五うんをわれとするといふありたゞ主人の目あしどのをしらざるがもろ也

○さたさるもの、いふにゝ藥へんヒてくすりとなるといへば罪のおもきは佛よやありあんいふ心ゝ目なしどのにあふたる人は我すあはち目あしなりと知るこれを佛よあろ人といふあり其人は經念佛難行などもなさず何の思ひもあきなり經念佛あども心よかけはもろ

よつゝのおもきは佛よやならんといふりんざい大師のいわく造二五無間業一方得二解脫一と云々五ひけんの業とは父をころし母をころし佛身より血をいだし和合僧をやぶり經像をやくこれをいふなり父母とは天地有無なりころすとい取ざるをいふ佛も經像もとゝもよころしてとらざるあり解脫とゝ一切のさよひをとふざけはなるゝをいふ也いふこゝろは修行の人佛をもとめ衆生をさらひ有無よかゝはる内はいまだ迷なりそれを皆ころしてゝとらざる人を佛に成と說玉ふゆゑよ罪のおもきは佛よやならんといふなり

○つくりおくつみのしやゝはどあるならは
あんまのちやうよつけどころなし
ほとけをも鬼をもころそあく人は
あんまわうとてもるすべきかは

○よくものをあんするに地ごくもとより遠からす鬼といふは閻魔おり一代藏經ゝみあ人間をいた発んがた光ありわらにくの釋迦どのやいろ〳〵のうそをついておゐて
地ごくも身心よありくどんの釋迦のかゝ名也釋迦いろ〳〵の經ゝ說おかるゝがもろよ地ごくのくるしみをうくるなり

○さて爰よ頃しも八月下旬なれば大風大雨しきりよして洛中の家堂社塔もそこねければ蜷川新右衛門取物もとりあへず一休和尚へ御見舞ゆて御坊御内に御ざるか何と〳〵との外なる大風大雨御寺はいづくもそこねやさずしやとゆければ一休出合たまひてよくこそ御心付しものか

秋の夜は
紫式部

なぜに先づらしき大風よていん去ながら當寺と何事もいとやとて

わが宿は、しらもたてそふきもせそ
雨よもぬれずかせよもあたらず

と仰られければ其御庵はいづくのほどよていそとやけれは一休わらはせ玉ひてされはこそ大事のことをおたづねあれとて

わが庵は都のたつみしかぞすむ
よをうぢ山と人といふなり

と仰られければさては喜撰法師と相住おされいかとたはむれければいや喜撰法師にかりて居る也とありければさてと借家とのにていろとやてわらはれしかば一休また一首をよみ玉ふ

かりの世にうしたる主もかりぬしも
かそとおもはずかるとおもはそ

とよと玉へば新右衛門此歌を感じて扇子にかき留かりそえに参りても得道の德侍るとてよろこびて歸りけるが門より立かへりてさて〳〵おろしきたはむれ事仰られしようが、ひやべきと思ふ事を打わすれかくすせよ歸らんと仕候此心はいろゞ心得やべきとて

吹ときはものさはがしき風なるか
ふかぬときにといづちあるらん

とやければそのまゝ御返歌あやける

吹ときてうべさわがまき山風も
ふかぬとたにはふうぬなりけり

と仰られければ新右衛門ものをもいはそうおづきて暫く禮拜をおして歸りしとあり

○それを誰と、へばよしあのとはそがたりや

いふ心は一休釋迦をたらふくしかれども我もまたそもおい事をいふたとなりなせよあれば經の文字の心をもつて迷ひをしらそ何をもつて此有事をたらんや八万餘經千差万別なりといへども見聞覺知の四門を出すその四門のうへよおねて永く四門をはなれたるを經の文字のとく義をとりてとだりよ分別させまじきか爲也しかるに一向に經をすて見聞覺知の外に佛をもとめばこれ則邪見外道あり人の邪見をおこさん事をおそれて又一休和尚みづからよまなのとはそかたりやと宣ふあり釋迦をしかりてせんもあき裏をいふたあり法花經に曰舍利弗云何名諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世一諸佛世尊欲衆生開佛知見使得清淨故出現於世云々知見とは見聞覺知ありて、に略して開覺を不說開とて見聞覺知を則佛卽心の光影ありとしるといふなり然て見聞覺知の四ッは一代藏經の要文あり是をのぞいて別よ修道おし猶開とはたとへい迷の人とあしき夢を見てくるしひがとくそれはのたもおき事ありと人のいへども聞入ぜもし又聞しり顏にして我今頃よ夢さめてくらきに灯を得るがとくよて万法あきらかよ見るといふそれもいまだねごとにて夢ありよくゆめの覺ぬる人のいふは我とじめよりねむらされば夢おしなんのさかるといふ事あらん其とく性德まよひなきとしるのみよしてかつて得るとおしかくのとくあるを佛知見を開くといふなりまよひの人と見聞覺知をはなるゝといへども一向

よ捨て外をもとひとあれぞといへば又とりてまたりに分別する今爰よ込見よとらぞ捨ぞの事をいふ夢のうちの人よくき、只根木で作る土地藏がねごとをいふを見よるひさら〳〵と車の音に目をさませ

○釋迦出山語云

出山とはせそん山よ入六年端座工夫じもくして明星を見て元來まよひあきをさとりて山を出たまふといふ也

○一佛成道

一たび見聞覺知を自性の日かりありと識得れば萬法歸一亦まもらずかくの如なるを佛の妙道を成就すといふ故に成道といふ又佛の知見を開ともいふ又目あしよある人ともいふ

○爰に西の國の大名身まかりける今端のときよりやされけるは我死ては一種々の佛事をそつとむべからぞ紫野の一休禪師を請して引導を頼みやせ是より外よ望みあしとて死たりける人々あけき御遺言なればとて急き都へ使者をたて一休を語しける一休折節在庵よて易きとなりてかの使者と、もにうち連て下り玉ふ既に葬送の日限きはまりしかば音に聞へし紫野の一休和尚こそ此國の某どの、御引導の爲とて御下向ありしとて國々島々より聞はどの人足を空にまとふて貴賤くんじもし御引導を聽聞せひとぞおしめきける葬禮の儀式天おは花をふらし地よハ錦を敷て其〳〵そはひ誠よのべがたく其日よなれば數万の見物かの一休の引導をぞ聞べけれとおしあおける扨玉のこしをかきそへければ一休立出さまお龕の前よ一默し玉ふ諸人すはや今や〳〵と耳そばたてるよ一言をもいひたまはぞ天を仰ぎ口をくとつと開き地を見て口をふさぎて其まゝすつと退き王後ふ大名の御れん中きん達をはじめ一門家來のともがらまで是はいかなる後事やらんせ先ては一句をしめし玉へれと御衣の袖にすがりつゝ諸人の見物も與をさましければ一首の歌をよみおき都をさして上りたまふ人々是非あくその歌を見ればとありければ皆人これをきゝてあとをもおゝともいはれざる御僧かなと默して感じあへりしと也

○又一休堺へ御下向のとき淀の河船舟よ乘たまおける乘合に山伏ありける御坊ハ何宗ぞと問ふ一休われは禪宗ありと答ふれければ禪宗にハ我等がとき、どくはあらじといひける一休やさる、はいかにもきどく多し其方よそ何にてもきどくあらば見せたまへと仰られければいで我等が法力にて此船のへさきに不動をいのり出して御目よかけんとて一よこんがう二よせいたろをそじめてもみよもんを祈りければ皆々のり合のものども目をとを光見合ゐるところよあんのとく舟のへさきよたちまち不動の像火ゑんをはあつてあらはれたり其時山伏ぢう光んを作りおの〳〵おがを玉ふかとやければ皆人ふしきの思ひをなしけれ共一休はさらよふしぎにもましまさぬふりなりいろよ禪僧かゝるきどくハ如何よし玉はんとせぐりかけてやければ我等が奇德よそ身より水を出してあの火焰をそもつ不動尊をけして見せん驚分いのり玉とてかの不動の像の火ゑんよ小便をしたゝかしかけたまへば火焰はそのまゝきあて山伏の法力つきけれ此人一休を拜禮して奇異のおもひをおしける也さて舟より上り陸路をうちつれ行所よむ

かひよりなるほど大なる犬の山河にもおゝくばかりにはへか、りければ山伏ヤやういろよ御坊さきの行くらべよこそまけたりともあのおそろしき犬のいかりを止めたゞ今是へよび寄る法力をあらはさんゞ御僧こいかよとヤける一休是こいと安きことなりまづ斬りて見玉へとのたまへば山伏大いらたかの赤木の珠数をさらり〳〵とおしもんで一いのりこそいのりける一切衆はは〳〵やまず手元へ來るねんもなかりければたつさやよこさまかけて十文字犬のゝんどゝめよわびらうんけんそわか〳〵といへども犬はは〳〵やまぢ一休おかしく思しめしそこのき玉へ某いそれはとの事にあびらうんけんもそわかも入事あこあらすあのいぬのいかりを止めたらまちこゝへ來らせんとふところより畫飯のやきめしをとり出しろの犬に一目見せてころ〳〵とのたまへばさしもいかれる犬あれどもやき光し一目見てくん〳〵と尾をふり來りければ山伏もきもをけし宵人さても格別ある心得かなと感せぬものこそなかりけり

○觀見法界草木國土悉皆成佛

いふ心は釋迦目なしどのとなり得て天地万法は觀見こと〴〵くみな目あしどのありと說玉ふ

○草木さへ佛になるとなれば人間いふまおよばずむかし昔あつた釋迦阿彌院もみな佛じやといふたがうそをつかれたとのふ

いふ心は釋迦目あしの事を人々よしらせんとていこせたれども見聞の人其心をしらずして言葉のぎりばかりを取よつて一言葉も目あしどのよいひあてられされば習うそ也又有もの、いふはうそをいはずば佛とはせじとなり方便のうそこ皆實ある故也

○うとふもまふものりの聖

されば とて詞をひとへよきふまもあらず風のこへ水のおとまでも皆めしをあらはすあり人のとばよてあゞ別あらん其外身よふれ目に見耳よきくあゞの事天地日月うみ山にいたるまで一つとして法の聲なきものなしもあるようたふも法のこゑとあり

○柳こみどり花はくれなゐ

いふ心は目あしどのひとりよて能それ〳〵品々よ別る、あり自由あるわざありもしわからずして一めんならべ目あしどのせじ善惡なくしてよく善惡をいかち菩ゆとのよはあれて萬歌と、もない分別あふして能分別し見聞ずして能く見聞これなよもあるあれば目なしどの、牛馬無住の國の人あれこなり

○あらおれ〳〵ろの春のけしきや〳〵

目あしどの、けしきおもしろきとあり何の心もなきなり

○本來生死をいあれたる身あれば來る處もなく去處もなし三世不可得あり

三世といふ心のいまだおこらぬ所を未來といふおこつた心を現世といふなくあつた心を過去といふ是を三世といふ不可得とは文字に得べからぎとよむ心の一ッもくらぬ先を見るよ何ともしられ又おこた心もおこらぬ先の心と同じ事なりたゞ三心ともにしらぬ心也是を不可得といふなり云心い三世ともにしるともしらぬとも何とも思ひはからぬ不可得のこゝろのかはらぬ心なり是を目なしといふあり三世たゞ一心と成がゆゑに生死もなく本來今もなく來る所もなく去所もなし

○混沌のいづくともなく出ぬれば

混沌とは天地いまだわからざるときなり是則識前の心胸あり此ねをもつて平常つゝひ用るなり是をこんとんのいづくともなくいづるといふなり

○父母未生いせん本來もなく〳〵佛法とやらんいふ事もしらぎ何よならんとあんずべからぎたい何事もしらぬ心が佛なりその佛といふものは有〻もあらぎ無よもあらずさとりぬれば有ともなしとも知らぬ事なり一切八万余經を見るよ佛とあらん心はすてしもなしとかく古居など、同じ事なり

いふ所のこんとんの一歩を得れば未生已前本來もなく夢々佛法といふ事もしらぎたゞやすらかよしてひとりしづかなり爰にいたりて一代藏經を見るにみあたいことの日記なりもへよふる居など、同じ事と、きたまふなり

○爰に一休和尚の末期の句とて世の人の口にまかせけるそのかず多し是が實なり是は虚なりといふも不實なりいかにとあらば彼も御影を書付て贊をもとめこれも識をもとむい其贊よは出るまゝにあそばしけるとなりある處の御影の贊に

臈々而三十年　淡々而三十年
臈々淡々六十年　末期膈レ糞捧二梵天一

此句、々もあり又の語にて

惜用ヲ昨月昨日
返済ヲ今月今日

惜道し五つのものを四つかへし
本來空よいまぞもとづく
又ある末期とやらんに遊しけるとて人のいへるは
生也死也　死也生也
柳はみどり　花はくれなひ

一休題

喝
柳不レ緑　花不レ紅　御用心〳〵
行脚事畢　燒見月雪節
折二主丈子一
今日時節
柳こ緑花は紅

又ある人一休の御寺へ用事ありて參りけるが或夜沙彌小喝食をこまづけて一休の御遺言ともをおがみ侍しに一々名譽を極めたる事ども多かりし中よも極畜白贊の御影ゝ拜し侍りしよかうべといかよも長髮よして眼をきつと見出しうす赤き衣をめし丸竹の錫杖をつきいすまこしをかけ侍りし體に

盧堂六再來天下老和尚一休宗純末期書レ之

○又ある富家に所持せる白畜白贊を拜見せしこと是は蟹川村の卿庵に居やせし頃よや是も髮長くまこしやし卓にかゝり玉ふ山居の御影なり

山居鶴僧謹二松風一

不須臨濟德山輝一箇住山三十年
公案工夫了畢後
長松風波響參眠一
虛堂七世龍寶門客東梅純
書與詩一筆　印

一休老

とぞ有けれ見る目もすざましくて身の毛もよだつ事也

○はしをふて雲のそらへはあがるとも
くどんの經をたのまれやせん
きやを見て其よしあしをとりぬれば
せんあくともよあくよこそなれ

○しやかといふいたづらものが世に出て
多のひとをまよはするかな
人はみあだうりをのみにくきものを
いはぬおしやかのきやうなりけり

○是は是非と非よしておき生は生死は死花と花水と水草は草土は土
千境万物名をかへかたちをあらため出さたるといへども頓々常體是にして是のだうり
し故に生と生死は死花は花水は水草はくさ土は土にしかてつは讒ら走けしほどもおぢと

ひあちばこれ佛よある人あるべし一休和尚は何よもならぬ人あるが故よ是と是非とひと
說玉ふあり是人々生れつきの平常左右のところあり一休和尚のみよもかぎらず誰かゝく
のとくあらざるものありやしりぞひて我常に返照して見てさふまうたがふ事あかれ

○あめあられ雪やこはりとへだつれど
とくれば水なし谷川の水
あめあられ雪やこはりをそのまゝよ
水としるこそとくるありけり

○我は是何ものぞとづちやうよりしるまでさぐるべしさぐるともさぐられぬ處と我あり
我とは迷ひの身心をいふなりさぐるとて此身心は何ものぞと根源をさぐりきはむるをい
ふなりづてうとて上諸佛ありしりとは下衆生世界なりよくさぐりてみればさぐらぬ先に
は色身のありとも無ともしらずたゞきのきれなどのとくなりそこにてあつしつめたしと
直と境と應じ事を弁じてみぢんばかりもさまたげあし是さぐられぬ處也それが則平常の
身心本性の我なりとしる是を名付て目あしどのといふ也此故よさぐられぬ處ありといひ
玉ふなり元より色身の身よもあらずたとへば色身の樹の根あり万法は枝葉なり本たつて
末ならぞといふなしぞあに先色身をいふなり心經にいはく色即是空空即是色受相行識
亦復如是云々色とは色身なり空とは本智なり即とは其まゝあり受相行識は幻心也いふ心
は身心ともよ其まゝ取もるはざぞ本智なりと說玉ふ古人是を心經の要路といふ也是即ち
さぐるともさぐられぬところは我ありといふ語と同一言あり

○心とはいかあるものをいふやらん

すみ絵よかきし松風の音

ふたつあきものとなりえて一もなし

すみ絵のかせのさてもすゞしき

○死ぬれば空々としてあるやらん

またぼう〳〵としてなきやらん

死ぬればとて誠に死るよとあらず目なしどのよあへば萬おすこと思ふと色うたち

音聲とゝ〳〵皆目おしどの、わざよて少も心なきなり心なきが故ゝ死るといふ也

目なしよよく成ればなるもかしさも皆目おしよて分て目おしといふべき方もおし

○ゑに有やらん無やらんといふありいつこうよしらぬ事よていふよはあらぞ

○ありのみもなしとひとつのこのみにてくうにふたつのあじはひはなしありなしとあに名を

ありなしとなに名をかへて思ふらん見れとひとつのこのみなりけり

○おのれさへあつさはらはぬ不動めがあくまのうふく無用ありけり

あやまりてふだうをよきとおもふなよ其心こそあくまとなれ

○あきあとのかた見よ石がなるあらば五りんの代よちやうすきれかし

人はたゞ五たい五りんよ化さる、五つをさりてりんのみにせよ

○朝つゆはきゑのこりても有ぬべしたれかこの世よのこりはつべし

いあづまのかげよさきだつ身をしればいま見る我よあふ事もおし

○ほらぬ井よたまゝぬ水の涙たちてかげもかたちもなき人ぞくむ

うそをつきうそとしらするうそこそはこれをまことのあるまことかな

○目よは見て手よはとられぬ月のうちのかつらのごとき君よぞありける

とれば得てすきてはやきは矢のとくひきかへし見よもみとりの月

○萬法を見る水ことよのどかわきおもはて水を一くちにのむ

四つのうみをたゞ一口よのみつくし今ぞしらるゝものとあじはひ

○釋迦さんかいの所にまかせて佛よなるといふしるしおしとかく不明あり死すれば我もなし

人もなし、やかみだも見ればもとゝ人の性をうけつぐ地獄よぞ入

きんろいとゝいろ〳〵の法を立さま〳〵の行法飛行などする事也死すればとは悟れば

といふ事也也ゑ我もなし人もなしとおりいふ心はさとりて後きんかいの法をみればそ

でもなひ事あり釋迦彌陀も、とはよく目なしどのに成得ずしていろ〳〵のきんかいをし

て地ごくにいるといふありたゞ人々に文字をとり苦行あどさせまじきがためかくいひた

まふあり

○夜もすがら佛の道をたづねばわが心よぞたづね入ぬる

いかあればたづね〳〵ておく山の道なきかたよ安くいるらん

○おもひいれと人もわが身も余處ならずこゝろのほかよこゝろあければ

かへりつゝまた立かへりよく見ればおもふこゝろもそらこゝろがな

心とてげにもこゝろあきものをさとりは何のさとりあるらん

さとらぬもさとるも同じまよひなりさとらぬさきをさとりとぞいふ

○何事もむあしき彩とさく物をさめぬこゝろをあげきつるかな

さめればさめぬさきこそさめつるよさめぬこゝろのあどもめあらむ

○わが法こゝいはでもいらぬ春のはなもひらけてちりてつちとこそなれ

春くれば散ちる花もとくのうゑきかねは人のあるゆゑごかし

此本歌は文の終の言葉なり佛の常樂我淨をよめり是一卷の流通なり我々は非淨なり法とは常樂なり歌のこゝろはこゝもかしこも我法なゝゆゑゑよいはでもいらぬとこそ春のはあのひらくもちるもつちとなるも皆常樂現前のところをいふあり

○一休の御こゝろざしをふもひ見るよ寒山子の風相にかはる事なく寒山師の詩句よ

我心如寒月　秋水清無底

とありしが一休の道歌よ

我こゝろそのまゝはとけいきはとけ

あみをはなれて水のわらばや

とよませたまふこれ寒山子の詩の心より寒山の文殊なりといひ傳へしが一休は定めて普賢なるべしされべ狂雲集よ其詩文多しといへどもたゞ人々の目よは見へぬをゝへみて其中より金つんぼの耳へも入やすき詩を書ぬき盲の目よも見あきらむべきひらかなよてしばりつゝ子供とも覚ゑさせ大人にも未だしらぬ人よ見せ侍らんとうたことをろへりみず仄平をわきまへず人の書あやまりをもつてわがあやまりとす我むやまりとす我むやまりても苦しからぞうくなん出しぬ

一休和尚狂詩二十首

題鉢敲
畫不笠分夜不曲
孤篁叩罷有何益

元來有物不離身
至躰分明無面目

今日復梅法師沒落時
無髮彼岸笠又無杖

往昔江南横斜疎影古
欲問風欲開鉢

獨臥寒衾患幾千
夜深依被半風食

一生忍業動焦身

東西南北自由身
花發十方淨土春

揚手同揚伸足伸
起居動靜似侮人

餘身貧乏雨晴稀
結句食犬引腰飯

起青道心成法師
伊勢嶽底暗皺眉

余身貧極有誰憐
天至曉鐘未作眠

八寸推根尚勝人

漫〻 長万 秋射 又本 働書 平大 鷹
江駿 風手 有る 無提 生羅 民
宿源 不下一 有名八 便白 青盛 嬢讃 愛章 笑不
波九 洗山 谷浪 人之 壇地 言図 布風 天大 雷
已郎 笑源 合八 船浦 田渋 屋 殺是 其瀧
落流 雑氏 駿島 堅駿 出高 切 何面
弓弓 恨兵 国浦 守る 国春 〻〻 館 睡 事駒
国 戦人
恰 日平 援兵 宇日 足譜 坪
如三 夜家 霜法 治本 下人
初 風迎 忠違 川時 米信
月 藤尽 信者 時 仲
掛三 駿出三 亡源 飛見 乱如 兼
晴 波堅 菊九 飛 鉢屋 鎧 用調 隠
定一 鎧城一 王郎 鉢屋 恒一 忍一

時 手猶 無若 木少 若紅 一元 入
相 中富 酒楽 石年 有顔 切来 通
奏貸 経怨 賛無 無十 其 貫紐 寄楽 有 女修
頗阿 雀忘 兒茶然 心五 個駆少 生口 行
彌是 七文 又好三 多月二 嬢冠八 迷面 涅若
陀何 佛殊 無富 世如 隠沙三 塗無 時
一俳宇 師 餅貴 上出 志喝首 所言 年
人 不
殺 定髪 山習 鳴一 鉢児 十百 須
有嫁 個切 呼笑 前忘 方億 更
愁露 風年 是紅 吹御 諸毛 老
我 人髭 流可 此顔 味年 佛頂 去
無 小少 只入 玉花 致十 出擁 革
一 飽年 文鶴 瑠似 推二 身丸 頃
頗 時 柔 字霞 哉開 参三 門痕 巾

忽伸左腎一取來者　天下英雄在二殺中一
生年十六美男兒　身命碎レ珠同レ馬時
熊谷道心從レ此發　法然庵室念二彌陀一
佐々木四郎宇治川先陣圖
萬騎如雲宇水邊　東關諸將各爭先
功名雖出二四郎上一　一馬化レ龍何若レ鞭

右

一休和尚往生遊歌百首とて

阿彌陀佛さとれば四ち去此不遠まよへは遠のよしよこそあれ

○三國の法はしあ〳〵多けれどしやかのおしへとぞあるまよはされるぞなき

○儒釋道三ッのおしへの別ならず善よ善報あくよ惡報

○ひかしより智慧ある人の佛道は二世あんらくのおしへとぞある

○三ごくの世々のかしこき君臣よしやかのおしへを仰がぬはあし

○三寶よ歸依する世々のためしみよこく土あんおん土我彌陀

○一心よりまとの道よいる人のその行すへは子孫はんじやう

○公家武家のぼだい樹する手本よはかまたり大臣多田の滿仲

○道よいるすあはんじやうの例よと藤氏源氏の家をみてしれ

○せんじやうは忠孝多しとんせいとげまたひあきめがきもの、ふ

○もの、ふのとんせい修行手本とて西行法師さていくさがへ

○今も又十樹八素の友がなしろさんのひかしおもてれぞまる

○とんせいと不過の人とさもあらめなとげてぼだい入はうせんけ

○大唐の加福禪師と樂天はともよ念佛座禪とどきく

○慈谷がとんせいしも行功德みよおんしん平等自他の成佛

○四大五温みなくうよしてすこそまことの念佛座禪とぞいふ

○家よりあり不忠不孝のともがらはとんせい修行あやしかりける

○成佛は異國本朝もろともよ宗よはよらぬ心よそよる

○おや主よ忠や孝ある人々は家よありてもぼだいたのもし

○高法の行とよろづの事なれとこゝろ〳〵に道をつとめよ

○世とのがれ修行の道は別でなし智者愚者ともよ座禪念佛

○無智愚僧俗男女別なれどぼだいの道はひとつ事なり

○佛說はぼだいねとんの異理よて二世安樂のおしへなりけり

○善惡すれどあく事きたると惧ゐよ先世さいごう卽爲消めつ

○皆人のねはん常樂しらずして生死無常をなげくあはれさ

○佛だよ定業のがれ玉はねと、やくいんくわのむくふ幸

○佛性と不生不滅の物なれとまよへば生死流轉をぞしれ

○何事も定業ありといふ人もまことのときはおやろきぞする
○佛道ゝさとれといふて何事ぞいんぐわぼだいを得とくする也
○よの常に工夫觀念つとめあばまことのときに心うごかじ
○智惠あるは若も道をつとむるに老てぼだいをしらぬおろかさ
○人はたゝ平生志願なかりせば修身齊家もいかゝあるべき
○何事もせんせのがうといふ人のぼだいつと光ぬこれそ猶くち
○我等今悲願願願をするをまて有爲の法とてそしる佛陀や
○ふくとくはねがふよ來るわざわいはつゝしひかどよ入ぬとぞきく
○一さいの諸ぶつぼさつもひとてんよりぼだいねてんの成就し玉ふ
○一念の中よりまよふ雲おこり、んあ永劫やみぢとぞある
○つら〳〵とめうりもとむる人みればとひわる人て佛ならまし
○神祇佛ゝみつのおしあをとく人の何れの道もいらぬわさまし
○一念のとひ眞實ぞたねとなる九品のれんげひらけこそすれ
○よの人のゐんぐわぼだいをしらずして五ぎやくのつみをつくるあはれさ
○戒たもちざせんねんぶつゝとめつゝとひある人は佛あらまし
○比丘〳〵の其身のつみは扨おきぬ人の道心やぶるうらめし
○當來の三會のはるの花もまた現世のとひぞたねとあらまし
○世中よ我ぞさとると自慢して名利もとむる人のおはさよ

○正法の花ぞの、山の草や木をむかしのはるとなすよしもかな
○石と利とをもとむるとのくげんやあ人よつかてれさいにつかてれ
○今とても天地のみちのかてらねばまつせのわれらぼだい願もし
○財寶は身のわだなりと思ながらなはも、とむる心はかあさ
○釋迦も又あみだも、とは人ぞかしわれもかたちは人にあらぢや
○わくねんはおこりやすくてしひしんておこしがたきぞものうかりける
○道はたゝせけんせ舟のとぢもにしひしんとつの人にたづねよ
○ごくらくもぢごくもわれにあるあればわくねんおこるこゝろせいせよ
○わが氣よはたとひ入ざるとなりと人のいさめを用ひしたがへ
○人の非てしり安けれどおのか非は智者もしることかたきとそ聞
○あよとも人のこゝろにさかふこそ世法佛法さわりなりけり
○身を入て島けだものを救ひしは釋迦のゐんちの修行なりけり
○異佛て有さう無相にかゝはらぢ四相なきこそひさう成けり
○ぼんのふをそくぼだいぞとおすとは一ねん回向そのうちよあり
○貢僧して物とりくろふ沙門こそこれぞぢごくのかすとこそおれ
○本家來むしん無さうの佛をも五よくにひかれぼんぶとそある
○くわれいなる沙門をみれば皆人の光うがしやなりといふぞおかしさ
○脇わりてぼんぶこゝろのなかりせて本らいくうのひそう異佛、

○いまときの僧は中々俗よりもいんくわはだいをしらぬ佛だら
○戒たもち座禪念佛つと先てもこゝろあしきは造地獄から
○儒佛道おしえはたとひ得せぞとも生死大事とおもへ人々
○物とに執着せざる心こそ無さう無心の無住をりけり
○皆人よおしへの道にまかせなば本來空よのへりてそそれ
○みな人のとんとんぐちの瓶水と三づの川のながれとぞなる
○生は寄死は歸るぞといふとにふるきふみにそおはくみへけり
○六根につくるざいくとのちかはとり死手の旅路の高根とぞある
○たひはたゞうき物なるにふる里のそらにかへるをいとふとかあさざ
○極樂の月まつ夜半の念佛はくもさりとらふ秋のはし風
○障なく本來空にかへることそこれや西方往生とされ
○老の身の月日をかくる所作とたゝ香花にぞくじも座禪念佛
○西方の本來空に往生しむりやう壽佛とあるぞめでたき
○口はどに身の行ひのあらざればわが心にもとぢられそする
○わが輝はおしえの外の宗なるに往生要歌よむもおかしき
○わが輝にさらふべき法あらざればこゝろのうちに一もつもなし
○いにしへのちしきのおしへとひとのみいまはあよとてがまんけんどん
○まやはたうりいたいけ夫人極樂へこれぞ佛のわうきせつば

○僧侶は四大和がうの躰なるに五欲のちりをいかゝ引けん
○佛乘をせち弁説やわる知識世わたるものとするそかなしき
○妙にして神あるものはこゝろ哉天地にわたりみしんにもいる
○不義にしてのつめたくはふざい寶はつもりてのちは二世の身のあだ
○心より四聖六凡いでぬるよ何とてあしもがうと作るぞ
○名と利とにかゝはる心引かへてまとつくさば二世い安らく
○何とも今ヨの歡樂すぎぬれば明日はかあらぞくけんとそなる
○貴寫寺の僕のころもの袖とりむかしの御僧今そこひしき
○珍君の苦修苦行そ輝となるかならず來世安樂のはれ
○おしへろ道と世外に事多したゝしん實に慈悲をたすねよ
○罪障の雲霧ふかき身にもたゝ座禪念佛題目そゝさ
○まつしまやみなみの海も極樂の池水と同じ法の陸奥
○十方は唯一心の淨土おれ衆生もつとめ己身彌陀佛

巳上

異珠菴は末代まで出世すべからぞと仰られ和尚自の一代にも出世はましまさいりけれども出世の法語ども又ゝ樂なるを書蓮玉ふ和尚號と號なり自のたまふと廬堂の再來なりと其外ふしぎなる事を書おき玉ふ事多し又遺言のおくよ我死て百年すぎて唐土より禪師きたらば我再來とおもへまた二百年よあたる年我死骸を土よりはり出し見るべしもしかたち朽たらばいひ置く事と

平田止水居士輯
源　基定補正

智たることおもひて火中すべし大かたゝ死がいゝそこねまじとのたまひしとなり然るゝ百余年まして隱元來朝なりこれ相逆なき隱元和尚ゝ一休和尚の再來なるべし、からば涉死髮とても定てかわり玉ふ事あるまじきなり又今の涉木像ゝ、るかの、ちの作物ゝて詮日那あるひゝ弟子衆まで一休和尚の御そり髮ゝ守袋ゝ納めちけるが彼御像を作り奉るとき御長髮の躰なればとて直の御剃髮を御眉御髮ゝしたるまで佛工が植けるとなりさても御剃髮をするゝの代の我々拜し奉る事有かたからもやさてかく集めぬるゝ昔の人の書誤るも聞たがへるゝ有べけれども今まゝつたなき筆ゝ記したれば猶あやまる事も多からめこはわがおろかなる故ぞかしもるし玉へ必しも古人をそしり玉ふべからゞ此書は見違がひる寐の伽となし玉はゞおのづから耳底のかすともならばあしきかゞもゝもあらざらめかくいふおろかなる我も筆記せるまゝ〳〵ゝこれる心のちりさへひとつ二つは吹ゝらひ一休和尚のかす成ともとおもふがまゝゝ

鬼の目になみだは何の涙なる
ぢごくの釜の下がくすぼる
みがけたゞ力こふしゝ賢を入て
獄の鬼ゝまけて歸るゝ

一休諸國物語圖繪拾遺

新村酬恩庵の事

○一休和尚いまだ若くましゝせしとき山城御見物のため大德寺を立出たまひ南山城ときゞといへるにいたり玉ひしに古き寺一ケ寺あり寺號酬恩庵とやしぬされども此寺久しく絶て住べき僧も無ければおのづから野干の住家となりてふるき苔は壁を閉ぢむぐらは軒をおほひつゝ物すざましき有さまなり所のものども集りやけるはかくまであれてしはたゞ住べきといへる僧のおきもゝあるりしかるべき僧もあらばまねき此寺へすゑやけ度と彼やこれやと所のものゝつどひ來りやければ和尚つく〳〵と思し召さてもこの風景といひいかゝもおしき寺なり我にあたへゝば住おほすべしとのたまへば里人言葉をそろへ是れまで住べきといへる僧達六七人もいろ〳〵としてすゑ得ども或は夜のまに身まかりまたは行衛もなくなり種々のあやしき事ばり多ければいよ〳〵里人とても難だに行かふとゝくあれはて、しんとかたりければ一休つぶさゝ聞て苦からもいかゝも我住おほすべしあたへよとぞ仰ければ里人ども日々ゝわかき御僧のいちざる事といびける中にもいや〳〵禪僧は若きとて年によるべきとゝはあらずといへる者もありければしからば貴僧ゝまかすべしとみむ〳〵やけれべそこかしこと御覽ありいかさましれもの、住ぞと覺もるそとてやがて出たまふ在所のものどもこれをき、ていよ〳〵これまであやしきとの次第をのこらずやけ上さま〳〵制しとゞめやせどもたゞ我にまかせよとのみ仰たまひたゞひとりすご〳〵と荒はてたる古寺のまばらなるに其夜かすかなる燈明をのみ便に

て夜のふけ行をまちたまふすゞに子の刻ばかりとおはしさとき寺のうち震動していあびかりすざまじく鳴かみのとき音して年の程は二八ばかりの女いかよも容顔美麗のすがたにて忽然とわらはれて一休の御そば近ふ歩行よるそのとき和尚すこしも驚きたまはゞ大かた心得たるそゝこを去よとのたまへばあとをく消うせぬしばらくありて同じ年ごろの兒銚子かはらけを持そ又夜さむにハ酒をすゝめたてまつらんとたわふれて傍そばに近ふあゆみよる一休少しもおどろかせたまはずさいせんのものよ又來るかとのたまへば是も同じくきへうせぬとかふするうちはどなくすでよ丑の刻ばかりと覺しき頃寺内もろさわぎ稲びかります〳〵すさまじくてたけ一丈ばかりの法師おもてはわうだんを病もの、如きかほよて眼は朱をぬりたるが如くおそろしきありさまにてひらり〳〵と飛めぐり佛壇の下をしきりに、らみあがめたり一休得と御らんして三度まで來るとてそおろかなれはやく土底へ歸れよとのたまへば早もきえうせぬはどなくはの〳〵夜もあけ、れば在所のものども大勢かさそひ合かの寺へきたりさてもいか成一休とて定て変化のものゝところされ玉いんことのひざんさよと念佛おどやて一丁バありもへたて、ふるひ〳〵和尚はおゝしますか一休坊やわたらせ玉ふかとくち〳〵よよば、ればそのとき寺の戸はそゝひらき門の外ゝ出たまひければ一度にどつとかんじつ、もばしはありもしづまちずさて和尚様をたよりよして皆々寺へ入にける一休のたまひけるはまづ此寺をくづし佛壇の下をふかさ三尺はゞ一間四方を堀て見よとのたまへば在所のものども申けるは仰よてい得ども此寺は年久しきと承ハ殊よ故ある寺のよし申つたへひへばこはちやさん事いかゝと言葉をそろへて申ければ一休聞たまひさはどおしく思わば此寺をくづし其あとよいかあるがらんをも我建立すべしと仰ければさらば仰よ隨ひひはんとて人々あつまり寺をくづし佛だんの下を堀て見ればこがねをつめたる壺三ッまでほり出しける其金を一ッばは地頭へ進上しひとつは所のものへ取らせたまひ殘る金にて善つくし美つくしく堂塔を建立したまひしとゝり其時より聞恩庵を大徳寺の末寺と定められて此寺に一休和尚住せたまふ事とし久しかりけゝ今の世よいたるまで一休和尚の御隠居の寺とゆはやしさるゝよつて御真跡彌佛靈寶あまた有ける山城大和奈良までも眼下よ見はらし絶景諸人の目をおどろかし好士のもの遠きをもいとはずをこび春は、お秋ともみぢあるひは松茸がりあど、て群をおしけるとかや

地獄の問答の事

○一休かゝのくに、しばらく御逗留のうちに地獄などいへる高山あり古跡も又多ければ一見のためよ立出たまひけるを所の地頭かねて當話よき事をき、直て問まほしくはざとはづかの供まはりにてしらぬ体にて近く行ひかひそれある法師よ地獄極樂はいかよと問ひければ一休まあこよ何をたて、糞をくらへとのたまひければ地頭もつての外に腹をたてにくき坊主の惡口かあものあいはせそいましめよと下知すれべかしこまつて若黨ども走りよつてさん〳〵に打すへ高手小手よいましめければ一休自若として地頭よむかひ是こそ地獄よとのたまへば地頭心つきわはて、馬より飛下り手づから一休のいましめをときてさても有がたき御教化うなと禮拜し則わが乘たる馬に一休をのせまいらせ私宅へとゆなひ歸り種々の珍味をそなへ朝夕そばを離れず馳走いたさるれば一休これこそまことの極樂ありとのたまひけるとかや

文字御願作の事

○一休和尚御發生のためとて常ゝ粥をさゝゐりけるところへ長谷川與吉とて小ざかしき男參りあはせて御相伴いさしさて〳〵和尚さまへ此かもゝ付て御尋ゆ上たきは此かもゝゆす文字は兩わきゝ弓を書き中ゝ米といふ文字を書ゝは子細こそひゝめ我等ふしん至極ゝぞんじゆそもかもゝゆものは水の中へ米を入れしるくやはらかに焚たるをかもゝゆなればさんずいに米とかあるひは食扁に湯などゝこそ書べきものゝて侍るにいかなる子細にてかやうに書ゆやらんと尋ければ和尚こたへて宜く此字は子細こそあれ昔大唐ゝ神農伏犧とて聖王おはしけり其頃迄はいまだ文字定まらず米食などの文字ゝあれども粥といふ字なかりしを伏犧神農其外あまた聖賢たちを集めて米を水の中へ入れしるくやゝらかに煮てそちもれば腹中とゝのひて消やすきものあれども此文字いまだ定まらずいかゞに迫るべきやと有けれども何れもあたまをかたふけさまゝゝと思案し玉へとも思ひ出し玉はねば案じはづらひて先々かもゝ焚て人々ゝすゝめ玉ひけりされとも誰あつて思ひ出し玉はざれば神農うつはものゝ上ゝ箸をからりと置せ玉へば弓のやうゝ

かくのゝとく見えたりさてこそとて硯ゝきゝ弓を書て中ゝ米を書ありとこたへ玉ふ與吉手を拍てゆけるゝ天晴御とんさくにてましますいかさまゝえあき事まてはいまゝ何をゆたづねゆ上てもらちあけ玉ふ御事とて何んと笑ひけりされば此おかしきにつけて又不審こそいへ只今のゝとくわらふといふ字を竹ゝ入ゝ犬ゝ書こそ心得ゆさずわらふといふ文字口篇にひろがるとか目篇ゝ鼓おどゝこそ書べき物にて侍ふめ竹かむりゝ犬といふ字といかなる子細ゝて書ゆゝぞと尋ければ一休聞しめして仰せるゝ是もかもゝと一度ゝ作られたり笑といふ字をたくさんとてあまゝ聖賢なふひ居玉ふ處へ少き犬かしらゝ籠をかぶりておとけ狂ければ人々一度ゝどつと笑ひ玉ふ其故ゝこそ右のゝとふりかく也とのたまひけるいかさまいゝれを承れべおもしろき御事かおとかんじけゝ處を和尚みすましたりと思し召惣体文字といふものは一々よく理をせめたるものゝてござるぞ日用ゝみなく書ねばならぬ會といふ文字は中にもよく作りたる文字にて御音經の中ゝも金銀瑠璃硨磲琥珀ゝと、ヒッの寶といひあらべし第一番ゝ金銀といふてある其金銀あれども持べき人かもたねば寶とはならぬ依て人といふ字の下　主といふ字をかきて金といふ字ゝ讀す何とようしたるものゝてゝおいかと仰ければ成程とゝいひながら此男も何かをどんをつきたく思ひて和尚さま御尤の仰かゝ草行でかくときはいかゝも人の主にはへども点字で書ますと金かやうにかきますれば主といふ字とは少しちがふやうゝ存ますがいかゞゝゆければされば不審ゝなくて叶はぬところそこが第一の意ゝつけどころゝ一日もおくてはならぬ大切の金なれどもしんでゝ牙ゝつかず入らぬものゝよと仰られければ扨も〳〵淺はかなる御たづねをゆ上一生の寶を得たる事よと悦ひてこそ歸けれ

天狗出答の事

○一休陸奥國かしまの宮居一見のため參詣なされけりすでに御社ちかく歩み玉ふゝしげりたる森の木陰より何ものとも知れぬ丈ケ七尺あまりの山伏つゝ山來り和尚にむかふて佛法いろ〳〵問しかけゝれば胸にありと苔玉ふさらば割て見んとて氷の如くなる刀をぬきて心もと

にさしあてけるに一休すこしもさわぎ玉はず

春とにさくや吉野の山ざくら
　木をわりて見よ花のありかを

と古歌を詠じ玉ひければ變化のもの恐るゝけしきよて何方ともなく消うせぬいとゆめでたき歌にこそあれ

輕口問答の事

○甲斐の國へ一休御下向のとき所の某かねて和尚の話答よきとを聞およびし故一休の頓作をまのあたりよ聞んと思ひめしつかひの童よおしえいひけるゝ和尚こゝを御通りのとき生徒塵のときいかんと申す和尚なゝとか言句あらば喝といふて立されよといひふくめ教けれども聞なれぬ言葉なれば愛がたき貌よ見へけるもをかさねていひきかせけるには生の字はなまといふ字なゝぞ思ふといもをいんとてねたるものと覺へよとねんごろにおしえおき一休の御通りをおそしと待たる所へ和尚何心なく通り玉ふをかの童かけ出てあまのいもの時いかんと、ふ一休取あへず爰てもよし燒てもよしと仰ければおしえのとく喝といふ一休こたへてゑぐひかと有けれべ某どのとおかしき中よ頓作あるを感じらけるとかや

蛯川秀句問答

○一休ひえい山へ登り玉ふとき蛯川新右衛門といふもの供御申されける折から彼山へろゝりし頃和尚さまへ申上たき句ふとうかみい問申て見候はん御付被下よとて

ひえの山陰をひろひもくかな

といひもはてぬよ

さしてとけふもとよ四畳の錢をばらり

とつけ玉ふかくわちはやきぬ頓作よてぞ有けるそれより山よのぼり玉ひて種々の詩歌あり前集

よ出しそれば

こゝ畧す

蛯川一休

一文や二もんは何と思ふおよ彌陀も錢光る世中

金持を十八よせてあがむれば中に五人は無學文盲

赤飯の答話の事

○一休和尚したきし在家へ御出ありしとき折ふし到來せしとて赤飯を奉りけるが高主こびたるものよゝ兼て和尚の答話をこゝろ見んと思ふ折から是幸ひと出あけるゝ遠慮もしく手づからにぎりては喰ひ掴りてゑくひ好物のよしにてしたゝか召上られけるを扨てそよき折からとて和尚さやせきはんなればひさとゑ胸ゑ通るまとときにそこつにまねゝはいかんといふ一休そらきぬ風情にてひたものまねりけるに亭主しきりよ一句おくしてまゐるゑせんおしいかゝ〳〵とせ光ければ其時和尚答へ玉ひけるはこて見られよせきはんと聞からよゝぎりかた光手形をつけれ通すはどにいくらよても通る也〻仰ければ亭主も理に拙てあきれはて赤飯を他よりもらひながらこゝろ見も得せざりけるとかや

極樂の沙汰の事

○一休の御寺へ日頃御出入申ける白俗あるものたゞ一向よ彌陀の淨土よ生れん事を願ふこゝろ

ふゝろしものありしがさるほどに當時の名僧とたけば八宗九宗のへだてなく足をそらさまになしあなたこなたへ參りつゝ極樂淨土へ生せん事の沙汰のみゝ日をくらしけるあるとき一休和尚の御寺へ參りつけるゝそれかしは淺ましく凡愚昧味の身と生れいへゞたもちがたき佛性を具せずはいかやうゝも修行仕り來世はかならず極樂國へうまれやたくとぞんじやすく願ふかく候去によつて四方の能化たちへ參りてはうけ玉り候ゝ他の師は十万八千里のとはきゝなたに極樂ありとおしゝ玉ふゝ一休さまゝは地獄ごくらく目前にありとしゝ玉ふ道のほどゝ候得ば百里や二百里のちがひも有まじきにも候はねどもかやうゝナ相違あるゝより某まよいや候間あされ此上の淨じひに貴ゝ示し玉へとなみだをながしくどきける和尚聞しゝしされば迷執ふかきものゝ爲ゝゝ十万億土と說き悟了通徹のものには目前と說き御經にも去此不遠とあるゝこゝありとのたまへば俗かさねゝやけるにゝかやうゝ丁寧に御しめしを承り候へども終ゝ心腑に落ず極樂いかほど尊やても見やたる事なく候はどゝとても御絲悲ゝ今一句ねんごろに御示しゝあづかり度こそ候へといふ一休きこしめしさればこそ極樂目前にありといふゝ七寶さうごんのかたちあるにゝあらず人の爲に口ゝ說てしめす極樂にあらざ人と自己に言句をはなれて悟り得ぎんばしるとおし、ばゝ坐禪工夫して見付よと仰られければ丞おしとて家にか、り燈ゝかふり晝夜あんじ暮し明して不斗あゝたゞしくも和尚の寺へ參りため息をつきさて〳〵自前の極らくこそ見付いへとてさても多も衆生の迷ひと知らざるこそ不便のとゝいへ此度こそ悟はひらけてひとて笑をふくみ小おどりしてやける一休聞てさこそあらめこゝろの面目たにひらけなば何のうたがひか有べきぞ去なから其方の明らゑやうはいかんとゝひ玉へばされば此極樂とやゝ貧賤富貴にもよらぎ老若男女の隔もなく朝夕きうりにある事ゝひといふ和尚打うなづきもつとも〳〵よき心得かなさて此極樂ゝ朝夕安坐去たる心ゝいうんと問ひ玉へばされば其事ゝてい美作疏敢ゝかぎらぎ朝夕のごくを樂しとゝたぶる所こそ極樂ゝてひよとさも自慢らしくヒうめん作りてやければ一休も手をうつてわらひ玉ひけるとかや

俗より弟子を賴まれ玉ふ事

○一休の旦那ゝれろかある者ありけろ此者折々まゐりて御物がたりを承りけるがあるとき一子出家すれば九族天ゝ生ずるといふ法語をうけ玉はりて深くしんじ只ひとりの子をもちたるが此小兒を御弟子におし下されいへとてつれ來りける易き事なりとて直さま髮をそり落し小僧となしかしらを御手にてさらり〳〵なでまわし玉へば此は何ぞ難有き御引導もあるべきゝ耳をゝまして聞居たるゝ和尚作り聲してきんゝなれ〳〵牛のきんゝなれ〳〵と三べんまでのたまひければ親衆に相違し大に立腹して是は曲もかい事をのたまふものかゝ佛までは得おらぎとも菩薩ゝなれとおりとも定てありがたき御引導も有べきとぞんじの外なる牛の陰莖にをつて何の益かいぞやとて一休をしきりに白眼ける其とき和尚うちわらゐ玉ゐてされは末法の出家は行ひ難くして落やすしさるほどゝ牛のきんはぶらぶらと落さうゝ見やれども一生落たるためしおしさるゝよつて斯はいふなりと仰られゞ彼旦那何とか心つきけんいゝれを承れは面白ありがたくひとて一子を連て歸られける

天の笠を着玉ふ事

○關東より一休御上京の折から然るべき大名と覺しきものとあとにあり先よなりて笠ゝせ玉ふ頃しも水無月のそゝかつかなれば暑氣はなはだしかりしかども笠をもめさぞ歩行玉ふかの大名もこゝろやさしき方にて使をもつて申されけるはかゝる炎天に御坊などなど笠をめさゝるや幸ゝ持し合せたる古笠いもへこれを着せられよとて笠一かいさし出させければ一休も禮を正しくして宣ひけるは御心ざしのほど近頃祝ゝ申てはしらしながら此法師い天をろさよ着しいへばあつくもぬるくもはとずとのたまふ使の者たちかへりかくゝと主人よ申上ければ大名もいかさまゝ主たゞ人にてはおきぞとて必ず馬のけあげもかけぬやう日陰をよきて通せよとて猶も同道申けるさて留りの宿をもはかまいあく同宿し玉へと申つかはせける故是なく暮よ及びぬれば同し宿に泊り玉ふ其夜かの大名の御方より使をもつて へ送られけるい書のほど笠を送らせんとやたる者よてい旅は物うきものよていとに此ごろの暑さよさこそつかれさせ給はん御酒一献まゐらせんこあたへ入らせ玉へと有ければ一休過分の御事ありとて使ゝ案内よて行せ玉ふさて奥の間へ通り玉へば大名壁をろけ玉ひていろよ御坊よ和國のならい人コ逢ときは笠をぬくとこそ承るよなゝとて笠はぬくせ玉はぬぞと申されけろ言葉の下よりぬきてもろけれくべき處なく候とのたまいける扨こそ一休和尚よとすいし参らせいよ〳〵種々御ちさう申されけるとかや其席さま〳〵のれもしろ紀問答など有つれども間もらしぬ

稚き時御引導し玉ふ事

○一休いまだわつか十歳の御とき師の長老甲舎へ行玉ひ御留主の處へ日那うちよ相とてたるものありいそぎ御引導被下度よし使申來りければ御他行よていへば御歸りの日限もしれざるよし返答ありしよさ候へば御弟子がたよても苦しうら申是非々々とれして頼ゝ早年人を寺へ昇込みけろ折ふしれとあの弟子も居あはせざりければ一休さもしもしやう氣よ用意しさて棺に向ひて死人をゆびさし次よわが身をもゆびさし又両手をひろげて何のこと葉もなく喝とぞのたまいけるかゝる折から長老の供にかゝり來玉ひて物かげより此有さまを見玉ひのち此引導ゝいろなる事ぞとありければ一休申けるゝさん候死人をもゆびさしたるは汝が死たるゆゑよと申事それがしを指ざしゝゝ此小僧にゝ申事にて両手をひろげたるは大あゝ恥を我にかゝせたるぞと申ころ事にて候也とこたへ玉ふとなり

泉州堺にて遊女ゝ問答の事

○一休和尚さかひの浦に御越ありしと紀其處ゝ於客を宿そろ家居のうちに地獄といへる遊女あり此ものかねて一休和尚の名高きをしり一首ゝ詠じ奉る

山居せば深山の奥に住べよかしこゝは浮世のさかひ近さよ

一休そのまゝ御返歌

一休が身をば身はどに世はねべ市も山家も同し住家よ

と返歌し玉へどもこいつたゞおらぬ者とおぼしめしあたりの人にいかなる女ぞと尋玉へばあれこそ音に聞えし地獄と申遊女かるよし申ければ和尚其まや聞しより、てれそろしき地獄かな

と遊しければ遊女とりあへも

しよくる人のおちざるいおし

とこたえけるとかや

一食に小袖を玉ふ事

○一休師月の末つかた東山よし出といへる所へ御越なされけるかへるさよ今出川口の川原よ丸裸なる乞食の伏し居たりけるをひらんじてさても不便の者やとおはしめしは小袖を一重ぬぎて取らせらるゝに此乞食よろこぶけしきなく袖うち通しきたりける一休仰けるはさてもふしぎなる乞食哉一銭だにもいたゞき伏かむの乞食のあらいなるよよろこふけしきも視ざるは嬉しくもおもはざるかと問玉へば乞食こたへて申けるは御身はわれよ小袖をくれてうれしくも思はざるかこたへければ一休手をうち扨もあやまつたり一大事のさとりこゝなりけるぞやいかさま此乞がい人はたゞ人にあらもあらじ愚僧が愚痴をとがしぬるこそうれしけれとてたなごゝろを合せ目をふさぎておがみ玉ふ其うちよかい乞食は消うせけん小袖ばかり殘りける不思議なりける事とかや

大和路の藥師御利生の事

○みねの藥師は霊験あらたなる御佛よて願ひあるもあらざるもあらざるあるとき癪を病る人ありて七々日のあひだはだし參りの願ひを立て毎日〳〵おこたりなくまうでけるすでよ四十余日に及べども其しるしなかりければ如來を恨みたてまつりてさん〴〵に惡口しける折から一休和尚の御下りと聞しよりいそぎ御迎ひに出てしかく〳〵のよしを上ければ和尚聞し召し仰けるは如來のれいけん無にはあらずたゞおんぢが身を恨むべしさりながら我いのり見んとて狂歌一首あそばし藥師へ今ばんまうで、此うたをよむべしとのたまひければ病人よろこびいそぎ參りけるが頃しも五月中の二日なれば青陵叶參のその中よあるひは境世安穏後生安樂といのるもあり又南無藥師留理光よよらいかれを助け玉へこれをすくひ玉へなど、日々よの、しれば物さわがしくて心定かならずしばらくは内院よ入て人しづまるをまちけるがやう〳〵深更よおよべばみな人下向して燈明の法師と病る人とばかり成けれど件のうたを出しつゝしんでよみあげけり

南無やくし諸病悪除の願なれば
身よりはとけの名こそおしけれ

聲よみもはてぬに内院とりけだかき御よにして

ひらさめやたゞ一時のものぞかし

おの〳〵みのかさそこよぬきおけ

と聞へけり有がたき佛勅やとしばらく瞻仰して立上り見れば身のかさはおちてあともなし病々人骨ずいよ通りて尊く思ひすぐよ発心して諸國修行に出けるとかや

一休衆道くるひの事

○和尚は衆道すきよてまし〳〵て兒かつらきへの艶書こ、かしこよ有といへりされども心の動き玉はざる事は駿河の府中よ小玉弁之助とて郡に、げあき美盛ありけるよ和尚ふかく口説玉へどもしたがはざりければ狂歌をおくり玉ひける

花は根よ鳥はふるすにかへれども
人はわかきよかへることあし

とばかりよて小弁どのまゐる都がたのづくにうと書てつかはされければ御歌のこゝろよや耶けんしみ〳〵と御返事ヲ上てすあとち其夜まゐりて御のぞみに隨ひヤさんとヲ上ければ和尚うあづきよくこそ來りたり今朝までとさこそ思ひしが今いもはや用事もなしとて歸し玉ひけるとかや

傾城よ御引導の事

○赤坂の宿にいつきといへる名高き遊女ありけるがしばらくの病ひにて身まかりけりしたしきものもど集りてヤけるとそれ女は五障三從の罪ふかきにましてこれの身あれば大かたにてはかなふまじいざや一休和尚を頼みたてまつりて吊らはんと御旅宿へ參りかく罪ふかき女にて御なさけよ御引導なしくだされひゝありがたくそゝはめとひたすらねがひければ一休やすき事とてすぐにかるゝしく其家にいたり御引導遊しける

僧は衣を賣り女は紅をうる柳はみどり花はくれなゐ

喝とのたまひければ棺のうちより光明かくやくと見へしが刹さへ其夜に日ごろしたしくなしたる者どもの夢に成佛とげたくよしを告けろとあり又同所よ煎茶を往來の旅客ようりて世のいゝなみとせし男ありしが病もなくて頓死なしたるを近きあたりの者どもより集り水などをそゝぎ氣つけなど呑せけれども更に其甲斐なかりしかば折ふし一休御通りありけるを幸ひの事とて其よしヤ上御引導ヲ願ひければ

一ぷく一せん一期の間末期の一句雲客の話

喝と御引導ありけるが是も往生をとげたりとふしぎにあたり者の夢に見えけるとも也

大食の御咄しの事

○或とき殊外大ふうをいふ男有けるが一休和尚の御相伴の非時を給りけるが和尚の仰けるはさても方はつめらしき大食かあとのたまひければかの男いや是はたぶるゝヤほどにてはなくいん某が若き友だちより合かけろくいたしたるとき餅米一斗つかせ我等一人して食すれどもいまだ食たらざりければあたりヨ栗もちした、かゆるゆゑそれをも殘らず喰盡したるにあまりヨ腹ふくれたるにより河邊へ走り行大なる舟あるを見るより其舟を横にもちて川水をせきとめヤたりと首ふりてかたりけれバ一休聞しめしさてもおびたゞしき大食かなそれほどの大食はめづらしく去ながら愚僧がぞんじたる山伏ありしがこれも大食人よてかけ錄して餅米二斗をつかせてそれを一人して殘らずくらひ余りに腹ふくれけるよや廣き松原へはしり出て三の、へばかりの松の木を捻れてこしをかけ休みける所へ小さき蛇の大なゝ蛙をのみくるしげよ見えしが出きたりかたわらの見あれざる蜘ゝ喰けるにぢみ〳〵と腹へりたり山伏これを見てさてよき事をい付たる物かあとくだんの草を取て喰けるが通のつきたるよや此くさ人の消る草よて山伏は忽ちえて二斗の餅とゝんきすゝかけほら貝金剛枝など餅よもたれたるとかたり玉へば彼男顏色をかへて取入早々歸りて其のち二たびまゐらざりけるとかや惣じて狂かる空言はいはざるもの也かの男の大ふうをいさしめ玉ふ處也

化物御退治の事

○北國方へ御雲水ありしときある古き宮よ大なる石燈籠のありけるがいつくともなく毎ぜん燈明をとぼしけるが其燈籠のかたはらを大の法師毎夜ぐるり〳〵と廻りけるを人皆これを見て

恐れずといふものなくされども又誰あつて見とゞけんといふものなかりけり一休これを聞しめし拙僧今よひこれを退治すべしとのたまふに所のものども大によろこび日の暮るゝを待かねくだんの所へ行て見るゝ其夜もたがわず燈籠をめぐらしかざ車をまはすがとく皆人ゆけるはさても一休房がたいじ有べき由のたまひしかども叶々そのしるしもなき事とゝりく評判なす所へ又法師一人あらはれて其夜は二人はせめぐるほどに皆人いよ〳〵恐れをなして皈りしが翌日あくるを待て一休の宿所へまゐり御房の御口とは相違して昨夜之化もの又一人ふへて中々鎮るけしき見えずといふゝ一休聞玉ひ其一人は拙僧よて夜もすから追かけ廻りつゝに化ものは踏倒しけるほどゝもはや今夜よりて出まじきと化もの誓言をたてけるゝよりゆるし遣したり心易かれ今夜より出る事あらじと示玉ふはたしてそれよりは何の怪しみもなかりけるとかやふしぎも世ゝあるとなり

豆の秀句の事

○一休和尚はいたつての輕口にてましませばあち地頭の奥方より御ゆ越しあつて何とぞ御咄し承り度よし和尚聞しめし何より安き御事とて早速まゐり玉へば上臈たち居ならびて聞玉ふゝ和尚まづ佛説を切口上ゝて御物がたりありければ上らう衆感ゝ堪かね御教化のほはなし有がたくいと得ども余りみじかくが本意なしねてはくばなが〳〵と退屈する迄御物がたりあれうしとゆされけれべ一休ともかうも望にまかすべき幸ひはなしそれ〳〵拙僧さる方へ夜咄しよ参りけるゝいり豆を菓子ゝ出しけるがかはらようこの豆秀句とあしてべんといふ皆凡とてまめの子のまめなやうにおど口々ゝゆを中ゝ賢こくもおくゆゐる人出てゆさるゝゝは奥さまのよしの参りとてしたゝかつかみて喰ふものあり人々聞てこれはいかゝ豆の秀句におくさまのよし野参りとは心得ぞいかゝ〳〵とせむればさては御ぞんじなきにや井の内の蛙大海を知らぬためしありいづれもはぞんじのとふり當春それがし軒たる人の奥さまよし野へ参り玉ふに御供してまゐりしに道すがら名所舊跡うちながめさはの川邊井出の里玉水あとやうの名所つぶさに物してはどおく吉野ゝも成ぬれば山はさかゝ雪かと見まがふばかりあり神社ぶつのく殘らずめぐりおがみ夫より高き所にのぼりて四方をうちながめ玉ふ所にはかゝ嵐ふきて來て奥さまのぬり笠を谷底へ吹かとしける其ときそれがし深き淵にのぞむがとく薄き氷をふむ心地して慌をつとふてつひゝ取て歸りぬされども笠は少しはげてるをおくさま御らんじてさてもうたての事かなとのたまひしそれより立出法隆寺奈良初瀬寺などいふ名所三ッ山だるまじたゐまなどやうの舊跡御見物あつて御上京ありしところへ御一門の御女中の見まひ被成けるゝさもじんじやうあるぬり笠をめしていづれも御越しありけりそれにつけて思し召出され彼はげたるをぬらせよと仰ありけるほどに塗師屋へあつらへもれば銀三錢目にてぬらんとゆす奥さま聞し付てそれは六かしき事かなさらば手ぬりゝせよとてうるし屋へ鳥目二疋をもちてうるしを求めけるをひくろじ程ありけるゝ物じて奥さまはゆ事おびたゞしくのたまふもゐ是は少きとかな豆つぶほどありとのたまひけるさてこそ豆の秀句には三國一のことかとじまんらしくゆされたりとかたり玉へば上臈衆退屈して色わるく成にけり

國司へ下帶を遣はさる事

○或御大名の家中に片岡彌太夫といふ浪人が宅に一休まし〳〵けるを此所の地頭さゝつけて使

吉野山
一目千本

紀友則

者をもつて申上げるは長の旅は御つかれなさるべく見ぐるしくゐへども私宅へも御入來ありて御うさを晴し玉へかしと申つかえしければ和尚よくこそほまねき忝けあしとて使者と、もゝ地頭の宅へ參り玉へば地頭も本意よや思ひけんさま〳〵御ちさう申上てさて何よても御手跡をくだされ度と乞ければ一休やすき事あり旅宿へ歸りてしたゝめ進そべしと約束し程なく彌太夫が方へ歸り玉ふと引つゞいて使者きたり先はど御契約申たる御手跡此ものへ下さるべくといひきたれば和尚もあまりせゝしらやゝ見しけん彌太夫の書さしたる文のありしを使者にわたし玉ふ使者よろこひ持かへりて主人へ渡しける刑ひらきたれば見知たる彌太夫が手跡なり是をふしぎ成とかあ使の誤りよてこそあるらめと使の者を尋ぬれども直々御手より玉はりしといふにさては餘りよいそぎて申たる故御取ちがひありしものにやと又も使をもつて最前下されしは彌太夫が手跡と見へ申ゐねがえくば御自身よかゝせ玉ふをこそのぞみよはゐへと申つかはしければ和尚うなづき左はどよ深く御望あらばいかでおしみ申べきとしたゝかに包たる袋をこそわたされける使者もち歸りて主人よわたせばやがて袋をひらき見れべさもよごれたる古き下帯よてぞありけるが地頭どのも手をうつて笑ひける其のち又も御入の折ふし柳とばかりの大文字よて一字かきて送り玉ひぬ又ふるき屏風よ何ともかたちの知れぬ繪ありけり亭主にとひ玉へばあまり古くなりゐて見分申さぬ私親どもが申つるよは馬とかと牛かやらんよて御座ゐよし申さるれば和尚牛あらば角あるべし角あければ馬あるさぞべとのたまふ亭主申されけるよは御筆の次手よ此絵にも讃をあそばし下されよと申されければ易きことのたまひて大文字にて馬とやげあとけそ遊しる其絵今よありていとゝめを度ゐ藏よおさまりて

寶物の其二ッとぞ成たるとぞ

長咄よ退加せしもの、事

○さて和尚さま先夜のほはあしとおもしろくゐへどもあまり長きほはあしもあたいくつ仕ゐ何とぞ今夕はみぢかきありがたきとわれ〳〵どもよてもわかり安きほ咄しをほきかせ下されたしと一座のものどもほ願申上ければ一休いかにもよきはあしあり皆おき、やれや日本におろかゝら天竺までもこの上もないありがたきものゝ飯と汁じやげあ何と皆わろつたろ〳〵〳〵と仰られた

大俗問答の事

○あろ時出入の下男て、ろよ思ひけるよは此寺の一休さまをは今での知識者とて皆々たづねて見へるが問答とやらんを聞に何でもあい事いふてほじきして帰らる、我等も和尚ともんどうして見んとふと思ひ付て和尚さまよほたづね申ます男と申ものは生れ出るより珍寶と申ものをもつて出ますがそれを成人して落す人は是いかんと申ければいまだ言葉もひかねよ金玉といへともくろきがとし

大百姓があつたげあが其とありに丁度そあたの樣な貧家に種腹ひとつにて十八人の子をもつて今其方の申さる、通り親ふたりは正月元日より大晦日まで食の足としらす隣の大百姓の事をうらやみ居けるがある時從天に大勢をあつめ麥をふみかこいのうちは元より門外までにも干ひろげたるに貧者乞ゐ麥を見るに付ても此干さに麥ひしろ十八まい丈あるならば子供よ一枚づゝ當わのちあば我等夫婦が此苦しみも有まじきと思ふ事をもしらぞ子供等はあしよ

まかせてあそび歩行て目のとゞく所にて一八居ぬとよと思ふ折からよわかに空かき曇り大雷あり はためき大夕だちふりきたり大道忽大河の如くなりて件の干たる麥なか〳〵取入べき間もあく殘らぬながしたるが隣の夫婦ハ門口へ出ていかゞせんと思ふ所へあちらこちらより走り飯りけるゆゑ頭のかずを目見れば一人も不足なく剩 格別身をもぬらさゞりける依て昔より子どもは寶じやといふ程ゑ出かしやれ〳〵其長者といへるゑ大和國十市郡天の香具山の東北にすこし高き岡山を長者やしきといひまた其わきゑ白木塚ともいへる塚ありこれは其時の長者主人は元より家内出入ものまで一飯とゑ其ゑしを捨てふたゝび用ひざれば其捨たる著しせんと山となりしとて著づかといひて今にあり又佛說の中ゑも鬼子母神といへるは三千人の子を持玉ふ其うち一人を隱され夜叉と成玉ふといへる事もありとて歌よみ玉て

兩眼のあきらかあるを持あがら女にあへば目なしとぞなる

女房ゑ辨才天とうつくしい美人といふも皮のとあり

子は寶なりとの事

○一休の御寺へ常々御心易く參りける百姓の元より家貧しきうへに子多くもちて其日も過しがたき程のものゑて有けるが和尙のもとへ參りさて〳〵私どもはいか成因果にてハ哉ろぞんじの如く子どもは追々出來まして當年二才に成を下として都合十二人ゑで出來まし其中にはとし子もこざります私夫婦のゑのは日に三度の食さへ腹に足ほど下されぬ事とてもなく是がまとの子の地獄へおちたとゆものかとぞんじ升れば夫ならばどの子が僧どゆものもこざりませぬ又かやうの貧家へ生れくる子供も不仕合かとおもへばいよ〳〵不便ゑもぞんじます是も前生のむくひにてハ哉御聞せ下されよと言ければ和尙うち笑なづき尤〻さりながら下の子はいまだ二ッとおいやればまだ〳〵いくたり生まうやらしれぬかあらず夫婦のものゝ氣をつきぬやうゑして有ときゑひとつ處へより寢酒でもものんで氣をはらし仕込でゑ出かし〳〵するがよいと仰ければびつくりして和尙さま此上出來ましたら夫婦の者ゑ何と成ませうとゆければされば夫ゑ付てゑなしがある昔奈良の都の頃白木の長者とて日本ゑたれしらぬものゝあきりけり

親となり子と成くるも今ならず二世も三世も盡ぬ契ぞ○かずもあき子を賣人もありと聞く親でゑなふて鬼の再來○親ゑ過去わが身ゑ現世子ゑ未來後生大事と子をば育てよ

八ッ橋にて狂歌の事

○參河の國八ッ橋は名にしおふ名所ゑてそのかみ業平もかきつばたの五文字を句の上ゑおきて歌よまれけるとかや一休にもいかなる名所にや御覽あされたくや思召けんところの里人ゑあんないさせてゐらんずるゑ八橋はあれてかきつばたもなくところせきまで田をうえてければいづれをやつはしとも見もわかぬていなりければ

おとゑきく三河にゐけし八ゑしも
田ばかりありてかきつ葉はなし

とあそばされけるとかや

瓢簞の曲遊の事

○一休和尙御手ゑへ拂底のヒぶんゑて有けん一條もどりばしの辻ゑ高札を立られける

一此度日本老和尚一休三明六通を得て瓢箪をひつくり返す望の方々見ぶつ可有者也　今月今日よりはじめヤい

ど遊ばされて紫野よ芝居をかまへ玉ひける事とて言はやしければ京わらんべ老若男女貴賤貧福をわかぢ足を空よおして群集をおし芝居もつみぬれべさらば時分とよきとて一休御用意あり御衣のまへよ大ひなる瓢箪をぶらり〳〵と付たまひ両手よばちに持て西より東ひんがしより北北より南と飛めぐりはねかへりあんど幾たびもなしたまひ音をあげたんひやう〳〵とて二十へんばかりまわりはねまわりおどし玉ひて其後楽屋へはしりいり御自身よ大歌をうち玉ひ是か、はり〳〵とて殘らず追出したまふ見物のものども是はいか成事ぞとて狂かるもありあるひは今よりじめぬ和尚のおどけ故としばらくと口も得ふさがぬものも多かりけるとや

涙人御引立ありし事

○しばらく甲斐の國よりとうりうのうちに一人の涙人御出入ヤけるが一休さまと生佛よてましますよし國中みな〳〵ヤ事よ候へば何卒我かみの不自由かるをたのみ奉て身上よあり付候やう偏よたすけ玉へとてひたすら願おけれは一休もふびんよ思し召され一門にてもなきやと、はせ玉へは某が一門歴々まかりあれども尾羽うちのらしぬれは恥かはしくて參り得ず且は路銀のよすがもなく不自由よて迷惑ヤす身よて候あはれ和尚さまのたかげよて身躰よ有つきヤ度よしひたすら願上ければ和尚うちうあづきのたまひけるは其方藝能はあにを得たるや涙人こたへて万事不調法よ候とヤ上るいや〳〵れき〳〵の果とあれば禮樂射御書數のうち一々ゆび折立てとひ玉へども一つとして存せぬよしヤ上けれバ扨て涙人したるも道理とよがしくしばらく思案し玉ひけるに彼涙人ヤよて外よぞんじたる事なくいへども故あつて敦盛の舞一番ぞんじていとふよ一休きこしめして夫社日本一の事よとのたまひしみ〳〵と内談遊して不便よりするものをかたらひ其外鼓打などをよびあつめ天晴云合せあり芝居にまくを打て、かしこに高札をたて玉ひける

一此度上方より幸若罷下勸進仕勸進元て日本老和尚一休と遊されしかば侍はいふよ及はず町人百姓五里七里をいとはゞ貴賤群集してさも廣き芝居よ小家も破るゝほどに見えたる所へかの涙人しやうぞくつけ氣だかく身つくろひして舞臺へ出てあつもりを一番舞すまして樂屋へ入とひとしく一人の男出まことに御歴々さま御入御見物のだん有がたきなどいんぎんに一禮をのべさて此つぎよは何をかまてせヤさんほこのみ次第とヤけれは多勢のけんぶつ口々に大職くわんよいや高だちよ消しげよなど、思ひ〳〵よ言はやしけるところへ兼ていひ合せありけん五七人のあぶれ者どもこ、かしこよりおどり出ていや外の舞は見たくおしあつもりを舞せよといふ、れたる男同じ舞はほたいくつにはいんといへべかのあぶれもの共いや我々がすきじや敦盛を舞さずんば芝居を踏くだかんいやつかみひしがんなど、いふほどよ又敦盛をまてしけるが舞て、又前の男出て口上をふれければ又滝れもの出ていやあつもりといふま、につゞけて四五番まはせける其後はまづ今日は御いとまでひとて追出し水戸口よて明日は取かへ御らんに入る、評判とふれければ前の日よりも人は多く入ぬ御定のあつもり一ばん舞はし次はといへば又前日のとくかねて仕ぐみたる事なれば

幾へんよてもあつもりよと七日までこそ仕たりける彼涙人たよりを得て一廉の身上となりけるとかや所の地頭の耳にも入ぬれ共一休の事なればとて御しかりもなかりけるとも

文錢の御咄しの事

○ある人問ていはく和尚さま通寶の中に裏よ文の字を書たる錢のしはいか成子細よて候哉とたづねければされば中々数の衣をかさねぬ若といふばあらざりしと聞しよ中むかしのころよりありがたき聖君の御代となり御治世ながく百姓町人はいふに及ばず下賤の民までが日に増しおごりよ長じ乱國とやらは車書でよむばかり子どもの耳には聞のみよて衣食住の三ッをはしいまゝに美を盡し善盡す世代がありしとさゝしが其時御上樣の御目よあまり万民のうれひ遠からざる基となるべしと御憂をくるしめ玉ひし折から錢を鑄まし廣く日本中へ出し玉ふ印よ文の字を書せ玉ふそれゝいかにといふよ錢の穴は口也口の上の文といふ字は客といふ字ありこの結構の寶をおしめよと御しめしありといふ事をわれもきけりと

仰られき

濁り酒の問答

○一休和尚山居しておはしますときしたしく御出入ヲす仁寒さの御見舞ヲせし折からにごり酒をまゐりる玉ふところへ參り合てよめる

山居して心すますと聞ぬるに濁り酒をばいかで飲らん

其とき和尚とりあへぞ

山居してのむべきものを濁りさけとても浮世にすむ身でもなし

とばしけるとかや

山伏と問答の事

○一休關東へおもむかせ玉ふとき仕人などゆつれある事をいとひ玉ひて普化僧のすがたとあり尺八を吹て通らせ玉ふを道よて和尚を見しりさる山伏よあひ玉ひしに山伏しらぬ躰にてとひをかけゝるにていかに普化僧どの何方へ行玉ふといふ和尚こたへて仰けるには風よまかせて

と仰ければ山伏いひけるハ風なきときていかん和尚こたへて仰けるには吹て行とありければ山伏もがを丶られて口をとぢあとを見忘して過けるとかや

壁に寄する恋といふ題よて詩歌を詠じ玉ふ事

○一休和尚のかる口なる御事をよくしりたる人御作意を聞んと御庵へ參り壁よ寄る恋といふ題よて歌一首遊しゆへと所望なしければ取あへぞ

君さつちこねばやひとりぬるばゝり

恋にしたぢのなはたちよけり

とあそばしける又畑の恋といふ題にて詩を一首とこひければ

再々煙畑惹見
羊車不王美容殿
不動の古佛の事

六宮寂寞月昏黄
知有佳人慢炷香

○或人不動明王の古佛を秘藏して安置し居けるが常々其家へ一休こゝろ安く行玉ふあるとき彼

不動をみ覺してやがて一詩を賦し給ひける

全身眞黑稱明王　生付片輪目口張
一生不犯無念者　去何國固護廣堂

かく七言絶句を作り給ひ汝いかにも不動を信ぜるあらは眞の尊像を繪がきてあたふべしとて筆をとり給ひてさら〳〵と大筆にて水中ゑ岩二ッ三ッを繪かき給ひて大字にて不動尊とあそはしかく岩のとくゑ心をうごかすまじきと示し給へり

生前死後を示し給ふ事

○ある人一休和尚ゑ生死のときはいかゝ心得てしかるべきやと問ふ和尚のいはく忠孝仁義に過たる無しと仰ければいかゝも有がたく心得ヤれ死ての後ゑいかんゝ非の〻ちは茅茨葬とやならん汝何とて死後をはろるぞや自得せよ生あるものゑ必死あり中生臨終のときと思ゑゝ臨終のときも中生より目前に死苦いたるとも驚くに足らぞして生死に念をかけずんは微塵も屈する事かしとて一絶を賦てあたへ玉ふ

不レ辭因果受塵纏　止水對觀垂柳邊
明鏡本分月下客　花晨興到樂皇天

また問ふ如何か是佛一休答て曰

河泊來りて水を求む

河泊は水の神より世界の水ゑ我手のものをさし置て却て外に水を求むるがとく汝が本分の佛性を顧て自知せよ

佛ゑとこゝろもあらぢ身もあらぢ
あらぬものこそあらぬなりけり

一絶を賦して云

無始無終我一心　不成佛法本來心
本來成佛佛妄語　衆生本來迷道心

しやかといふいたづらものが世ゑ出て多くの人を迷はするかな

此歌の意は前篇にくわしく爰ゑ略す

蜷川新右衛門藏問答

○あるとき蜷川つれ〳〵なる折から和尚さまの詐へまゐりたいぶれたる事を尋ずとて

このうたのこゝろはしらじ恐らくゑ
釋迦も達廣も定家家隆も

一休返歌ゑ

釋迦達廣定家家隆もしらぬ歌
くその役にもたゝぬなりけり

蜷川

おもかげのかはらぬときゑいかばろり
かはりてだゑも命れしさよ

一休

おもかげはのはらばうそれ年もよれ
無病そく才死なばごつとり

同

世の中よあきかせたちぬ花すゝき
まねかばやかん野へも山へも

○扨一代のうちに狂詩の多かりしを前集に出しぬれど今またもれたるを出す余は狂雲集を見玉へかし

於一谷
寿永三年三月天
源平合戦無申手
九郎冠者乗兵船
海底死人数万千

題茶釜
有口不言全体圓
并呑大海江河水
不離色相絶諸縁
吐出超脱一味禅

題黄露
鳥亦説経似度他
林間花若諸菩薩
樹頭樹底妙音多
中有黄鶯小釈迦

又題一谷
打路平家無数兵
敦盛熊谷進遅速
九郎冠者大高名
一朝都向上時居

路堅之時
東山々下玉毛頭
移得天台興羅滾
今日出家作出既
平生所望一池休

題男根
我此貧裸入寸強
一生不鑑美人手
夜来抱汝風空床
頓興裙中日月長

題那須與市
與一源平第一弓
塞目祈念歌馬上
判官召懐射成功
七花八裂扇興中

題宇治川先陣
頼朝大勝秘蔵馬
生食前非磨墨後
宇治川先陣給之
梶原源太一鞭迎

題蚤
垢耶塵耶是何物
雖為人喰十分肥
元来見来更無情
還僧一捨段生涯

歳旦

有レ錢有レ酒有レ金銀
留寺他山層達

今年仞成人德
孝レ耳ニ案内一徂來頓

日夜思レ君長不レ忘
夢中携レ手欲ニ相語一

夜深戀慕臥空床
被レ蹴ニ曉鐘一又斷腸

花咲同花開而老易花
時花亦可ニ惜重一

花落花過雖問花
生天成佛閻思君
有レ力秋風不レ應拂

灯下吟レ詩瘦十分
胸間鎖斷愁山雲

飯在中央盛曲盈一
慇懃頃刻三酒性盛水

頃刻無味鉄崑崙
水出推流地獄門

布袋布袋依レ袋眠
大漁食腹便々

人言是座禪工夫無二一字一

學道參禪失ニ本心一
相江暮雨楚雲月

漁歌一曲價千金
無恨風流夜々吟

扶桑國裏沒ニ禪師一
今日窮途無限淚

東海兒孫更有誰
他時吾道竟何之

東海兒孫更有誰
他時吾道竟何之

狂雲身上自尿臭

東海兒孫更有誰
他時吾道竟何之

或僧者或家滑稽
來蝙蝠暮堂裡

飛語の歌

不レ符ニ人天大衆僧一
怪長無明滅ニ法燈一

○はちす葉のにごりにそまぬ蓮の身はたゞ其まゝの真如貌

○佛とてほかにもとむなこゝろこそまよひの中のまよひなりける

○ちればさき咲は又ちはるとの花のすがたは如來住

○ぬらしつる袖のあみだのかずくまもおき而かげの月ぞ立そふ

○おのづから身はいたづらぞ成よけりこくうを常のすみ家と思へば

○かりの世よあだなる露の身をもちて千とせをいはふ人のたかあさ

○世のさまかへてすみぬる柴の戸に問とゝはある人もうらめし

○妙なりし法のはちすの花の身と幾世ふるとも色はかはらず
○其まゝにうまれあがらかゝこそねがはゞとてもほとけあるべし
○露ときへまばろしと覺え稲づまのうけの如くゝ身は思ふべし
○なげゝおよ誠の道はそのまゝよふたつともなく又三つもあし
○らくゝと心よてこそ岸よわたるもやすき法のふあ人
○牛死のことはりしらぬ人さまと犬の衣をきたるなるべし
○奥山よむすばずとても柴の庵こゝろからにこ世よはいふべし
○罔いづく里はいろにと人とはゞ本來無爲の物とこたへよ
○檜すてゝ灰にありなゞ何ものか殘りて苦をば受んとゞ思ふ
○忘執の雲をはらさで終る身のなり果を見は地ごく成らん
○けふりたつ野邊のあれをいつまでかよ所よ見なして身は殘らなん
○ひゞくゝよ行末とはく成よけりいつをかぎりのいのちなるらん
○闘もりこわが心をやかしぬらんそゞなる翔をかぬるとゝ
○すみのはる心の月の陰はれてくまなきものは本の境界
○はかあくもあすの命ったのむ蔵きのふは過しかならずや
○さとり得て心のやみの晴ぬればヒひもあさけも有あけの月
○三日月のみつればかけて跡もあしとよかくにまたあり明の月
○はるとに咲るさくらを見るとよなはかなしと身こそつらけれ

○待得てもはゞとゝかりし郭公とゝもをさそひでいづち行らん
○年々よしゞくれのそむるもみぢ葉を四方のうつらふためしともしれ
○月と家こゝろは上ヒと見る時となはかりの世のすまゐなりけり
○こゝろをゞ墨の衣よ染なして身をばうき世の道よまろせて
○寺を建堂をたてたろくどくよりたゞ常々のじひやましあん
○しばしげにいきの一息かよふはど野邊のかばねもよ所よ見えけり
○色相と其ときゞくにかはるとも不生不滅のこゝろかはらじ
○見ることよ皆そのまゝのすがた哉柳へみどり花とくれあゐ
○一箇々一休和尚御母君へ水かゝみ目なし蛇なんといふかな書法語を書て進せら
れしのちまた昔ゝりの祖師智識方の教化ありし言の葉をひきてかな文とあし念
頃よ示し玉ひし文
昔今よ平るまでうき身の有さま夢の如くよさへ思めきれいへば何事も御心のとまる事御さ
ちまたくい衣を佛御くはんはん有て法華經の文よ觀彼久遠猶如今日と御のべい此文の意いか
の久しきとをき事を見玉ふよ同じく今日のとくよ見玉へとの御事よていい天地ひゞけはじまり
左より已外かてるとなしと力の事をさとりたまふとの御事よていしかればさのみ深く御不審
あるまじくい佛法と力と生者死苦をいましめ玉ふのみさらよ心をとゝめても其かひなき諺
と見まひらせいを先輩家にもちひかやうやい事證據なくいへば如何とおぼし召いやゞ存
むかしの事を大かた引力入い都よ思想師とて日本にかくれなき御僧のまし〳〵ける其頃は

愛氏將軍の御代なりかの夢想こくしさとりの後歌よ

夢の世よゆめのとくに生れ來て

つゆとさへおん身こそやすけれ

夫人間のありさま万事とゞまるとなしもとより生のはじめをしらざれば死のおはりをわきまへずやみ〳〵ぼう〳〵として苦みの海よしづむなり佛ゝを哀とおぼしめして色々の仏方べんよて衆生をすくひ玉ふされども人間のこゝろ不同よして惡道へあゆみをすゝみ善方へは心すゝみがたくいたづらよ光陰をおくりあはれみの業果たへぞたま〳〵敎にたがふといへども名利の善をあすとはかりうな名利とゆは其身の名をあげ人にはめられんと思ふ心をたねとして堂塔を建立しときの宝貴におごれり我のとくの人の佛はふかくきらゑせ玉ふまことの道ゑ万事法度をそむかぞ世よしたがひてかたく法を守る人を佛道よ成就の人とゆあり仏年もはやくれ近く成らせ玉へば何の御望ゆざいはんや殊さふぢごくの証をもしろしめされいうへゑ行く水のごゝくよ御　をもたせ玉ひて御胸のうちよ何事仏ざあく候へば世尊御一躰の御身とゆざあるべくいこゝをほとけ三部經に己心の彌陀唯心の淨土とのべ玉ふ此文字の心はおのれがこゝろ彌陀たゞこゝろの淨土とゆ也しかれば十萬億土は御ねがひあるまじくい

佛とそおにをいはまの苦むしろ

たゞ慈悲心にしくものぞなし

此うたのごとくよ御じもよういへば何事も佛心と見まゐらせゆべくい古しへ舟田の仏はうヒやうよて宗旨ゑをしめまゐらせ人々すぎさせ玉ふい事夢とゑおぼしめされすいやゆまでもい

くしがたきはかやうよけあげよ仏入候てわゑくしもあがらへ佛法の仏事ゑもゆ上まゐらせ候御事は他生の縁ふかくとぞん じ候因果經に自以唯ならんと佛もゆのべ候また母よて候ものは七十六にて去年相はてられ候心昌と申せし辞世の歌

世々ごとゝ見えつかくれつすむ月の

かはらぬ色をたれかしらまし

此歌をくちぞさみて其のちゑそれさまへ參りて仏菩提の心をすゝめゆ候へとくりろへしゆされ候つるかのほめいをそむきがたくぞんじ候てたびゝ參り候つる母よて候もの、事おもひ出し參らせ候へば一しほそなたへ參りたく社候へはやそれさまの淨覺悟も大あんらくの道に淨心つき候へばめで度満足いたしいほなぐさみなどには淨かんきんもしかるべくいほ心つくして〳〵夢々仏沙汰いまじくい大般若の文に一切不行を佛の行とすと淨座い没をもつて世さる知識のうたよ

あら樂や虛空を家と住なして

こゝろにかくるそらさへもなし

出るとも入とも月をおもわねば

心にかゝる山の端もなし

これは生死よとりあはぬところの歌よていよく〳〵淨くふうあるべく候又弘法大師の仏辞世に

今はゝや後昔のつとめもせざりけり

あらんの二字のあるよまかせて

いづれもさとりの人はかやうよ日さわき候やうやおかれしまた慈鎮和尚のうたよ

かりの世よまた旅ねしてくさまくら
ゆめの世にまたゆめを見るかな

引よせてむすべば草の庵よて
とくればもとの野はらなりけり

是は色相のうへをかろく思しめしいへとの心にて候いつの日いつのときは大事來り參らせ候ともは心のうちに何事も思召候まじく候病難もしいたくせめ來候ともそのくるしみにまかせて相果候へと大唐の黄檗禪師の傳心の法要とやにも書おかれ日本よては聖德太子病なんのときは歌遊ばされ候

うき雲はいくへもかゝれ空に消
月とくまゐきひかり成けり

此歌のこゝろは何事もとりわき候とて無念無想の所をもちひ候へとのは事よて候又もらの問山のうたよ

何事も夢まぼろしとさとり來て
うつゝなき世のすまゐかりけり

此歌のこゝろといかなる大王きさき其外上下の人々かおしを給ふは死の道にて候こゝをさへはかくて候へばすなはち安ようの淨土九品のれんげにまとはれて大安樂のは身とおらせ玉ふべし大世尊のは說法にも女人成佛のかたき事をかくとき玉ふかやうの事を聞こしめしてはは道心すてさせ給ふまじく候其ことはりン荒々やわげ候男子に生をうけやの候てのこらず成佛すべきよあらせとよ龍女と八才にして三國に名を殘しや候ほ經にもほめ給ふ然ば女人こそなはもたのもしきは事よて候へば成佛とてべつにたつときゝかりもはなち奇特をも見せや事はあるまじく候はさとりのは心中にこれぞは不審候はぬと思召候事淨座なく候を大のさとりとや事にて候佛は入滅のゝち祖師先德のさたし給ふは法にも見理受用のふたつよては入候三ぞくをむは太儀に思しめしまじく候五戒百かい五百かいをたてられ候事もたゞ一身のさたよては入佛淨女房衆のはさとり有しは嵯峨天皇のはきさき檀林皇后なり其外人の數をしらず美濃のくよゝは興性寺の千代能とや女さとりて候其歌よ

とよかくよたくみし桶の底ぬけて
水たまらねば月もやどらぬ

かやうの事を聞しめして今日より禪宗のさんがくよは心をつくし給ふべし愚僧は手を引やそべしまづ〳〵くさ〳〵のは心をたゝせ給ひ後世をぼたすかり候はんとぼかくで候へとすゝめやものは何者ぞや又かやうよ不審をうけやものは何ものぞやと目に見えぬしてさま〳〵なりもへゑに六道りんゑのたねと成とゝ佛これを二ぞくと說給ふ一にけんどん二よいかり腹立るとゝ三にぐちの心この三つをたち候へといよしへ今よいたるまでしめすなりこれをしらざれば殘しうの心ふかき故に人をはたみをしりあればうらみこんじてたがひよ苦しみのなみだを流し袖をしぼるなり是みな一心のわざなり久しく遠き事を觀じ物をわすれざるも一心なり四百

四病をうけ大苦をうくるも一心也雪霜のさむき事をいとひ大温を苦とあすも心なりされば此心一ッを取とめがたければ六道のごうたへず生を生をかさぬ死に死をつぎうき沈むのみなり此心といふものはいかゞとゝんじゆに影かたちもあきものなり給ふあり無相よして有てるが故に古れば生もなく死もなしこゝを佛とも命脈の正体とものべ給ふあり無相よして有てるが故に古來より行とゞまる事なし住所さらゝあし色相の消滅ゝあづかるゝよつて無常と說き又は大死とのべて是を感みかあしみて定離とゆ也かゝうゝゆ入候はゞ心ゝかたちなき所をゆらんせられ候へとゆ事よて候何ものか色相をさつて佛神とも鬼神とも成ゆべく候なり淨土〆穢土の事こゝを以てゆ分別あるべく候ゆ不審のこれゆ候はゞまよひの雲千里萬里の外よりいゝ一つとしてゆ心といゆる事あるまじく候こゝを大正覺とゆなりこゝにいたりて心經にも色卽是空、卽是色と心き給ふ一心の外にべつのものなし本より經こもあし心に無始無終にして住所なし愛を開て天地草木の畢竟して見る法とあさく候見ざる法はふかしとゝゝ生死のさづなをなれて大解脫のゆ身となゝせ給ふべし

ゆ工夫にも古卽話頭ゆ不審はあれ候よし仰られ候尤　候むかしのゆ僧たちの集め給ふなそらへをあら〳〵かなよてゆおぐさみしよしるしゆらせ候

本來の面目のしめしやう不思善不思惡未生已前いづれの所より來る又とゝいかあるが是本來のめんぼくと斗もとひゆ候此言葉をうけとりて三十日五十日乃至一年二年くふうをとけて衆じゆやうゝ我が身の生の所は佛もいづれの祖師もしられまじく候佛祖ふまきの所是よて候とゆ候へば此上にじゆようとていろ〳〵大事あるよし長老ゆされ候間また是を工夫去て候やうと

天地開闢よりこのかた知られまじきとじもようす爰よて長老尤のよしゆされ候學者の智にかしえによつて其語をするあり大かた此分よ候

はくじゆしの話頭とていかなるか是そしさいらい意といふこゝよて祖師のいはく庭前の柏樹子とこたふ心をさんせよとゆよしのふして學者の日祖師の再來庭前のとくじゆしも同じ心よで候たゞ天然の理よて候前後しらぬ心にて候とてぢやく語に枝と直く荆とまがれりとゆ又色相分離してのちいかにとゝふ松直からぞ荆曲らぞとゆ三度四度ゆかへしてこれを至極の道理とゆす是は柳はみどり花はくれなひのこゝろなり此極意は口といふ根本無相なる處をしらんがためなり大かた此分に候

舊ぼうふりうといふ古則よろづよ友たらざる人これ何人ぞやと問ふがくしゆ耳をそばたて、是を聞き年月へてゆやうゝ我が一心と萬法の外よてと躰も色もなく候物にくみせぬものに候しかも天におはひ地よ滿りしかれば左右もなく脚下まん〳〵として有ける故よ法界一心とく

はんじて大國のうち居士名を殘すこれは口よ見ぬ物の有所を見出してかくのとくゆ也地獄此とさやられゆ候心ゆ入候也

本有圓成の事ほんらいの佛何の緣をもつてめいとふの衆生となりたるぞや學者くふうしてゆやうは根本は無念無相の佛なるを衆生の色緣にひかれてかやうよ惡うん若樂を得る身となり來て候爰よ念をとゞめ此界よりんえをくば本心の佛性になるとて此とき種々無量となしさま〳〵言葉をつくし番根しやうと見ろなり

たその話の事釋迦みろくはかれが奴かれはたそこのさとりをうけて年月へて老僧の前へ出て

座上ニ和尚無く眼せんニ我なしとヤて一味平等のところ何か差別あらんや然らば奴もあし我もあし上下元來佛も衆生も一躰あらずや大かた此分の心にて候

いかあるかこれ地獄としめされて年月を經て工夫してヤすやうは眼前これ地獄とヤ又とふ何事に地獄ぞ色相これぢごくなり色相分離してていかに眼光落地すこゝに見えず智恵によつて種々の語をうけ大利益無ニ落候てあさましく候

こはんかけざるときはいかん學しやのいわく小魚大魚を呑又かけてのちいかん大魚小魚をのむ此心は舟の帆かゝりてあるときは大なる魚がちいさきうをゝのむといふ也はのかゝらざるときは小さある魚か大あるをのむといふこゝろなり此こゝろは諸宗ニ少しも知らぬ禪家の大事なり有とヤさんとては世ニある事を吐く語をかくし又無なる事をヤさんとてこ世ニなき事を吐て心をかくして生死思推の處をむつのしくヤさん爲ぬり沙理り沙座ひ直ニヤべく候ありりんざいの三ケう三玄とヤ事の候かやむの事ハヤつくしがたく候天地の間ニ三つもとむ三つくろしとヤ事何ぞや是をしかも三ぺうとヤ事ありとゝくの心は父母と我と是三つの寶なり一つもかけては物ならぬ候三玄とヤはみあもとの無性はくろきうたちあり出生して万の事を行ひ候発ニ大秘密のとありようの字これ最大事あり

大國のなんせん和尚此猫兒を切る事は大衆こたへざるやゝなり趙州発ニ來てさうあひを取てかしらへあげ衣を脱にあて、和尚のまへに出る和尚このときねこを切て後悔そてうとう甚もつて先んぱく成る第一ニ色相の邪意をきろなり迷ひの衆生色心ともニ切とゝ得ぬたま〳〵切といへどもどんとうあれば成る、所あし文殊のりけんはふた、びつかずとヤ心ニて候

りんざいの四かつとて人の死たる所にいたりてかつすこの心たしかに心得たる僧まれなりたゝしやうしもう僧とヤは本ぶんニおとしてこれを至極す古人の見理此所ニあらずすでニりんざいこ仰根本不絶といへりしかれば當時の僧たち大あるあやまちなりとはをぢくニして衣をかへ人の眼をつぶして布施物をとりおのれが生々世々のはのはをまねくあれれむべたの第一なり

百丈やこの話の事大しもぎやうていのんかへつて因果あるや又なしやと、ふ若ていこく因果に路ぬとあり此報によりて五百生野狐の身ニ墮していんぐわこれき然あるものとヤむねニて候赤さとらぬして別にふかき事ハ座ひはんと思召まじく候此ふたいろの因果とヤこいんぐニにくふからぬとの事なり深く因果とこれちずといふ心ニて候此話問のまなこは生々世々の事をきつねによせてとかれたる所大智あるものゝに大智禪師とかや申あり一朝大國ニていろ〳〵佛道しも行の事れん〳〵に申上まゐらせ候又申す人迷ふとたこ火をもつて火をけさんとて土をもつて山をかこはんとすかやうおろかなる事は人々佛道に心の遠ざかる事萬里をへだて、手には百八ぼんなうのきづなゝる珠數をつまぐり二世三世をいのり生れう死れうのたゝりを見いだし石塔卒都婆にきぐくのありとおもひ梓にかけて死人と言葉をかこす事をいひて袖をしぼるもろ〳〵の敬もろ〳〵の道理を失ひ併ぱさつにやう語をうけ義理をそむきいよ〳〵もうもくのごく竹のうちより天をはこのる物は生々世々うかむこあるべからず西方非西東方非東無地獄無極樂淨土非淨土けんどんをきらずしてしかも又しらも外の大空さんまいよして大遊化のうちニありたい正直のこひぎやう無ざんなり念をきつてしかもきらぬ是を通力自

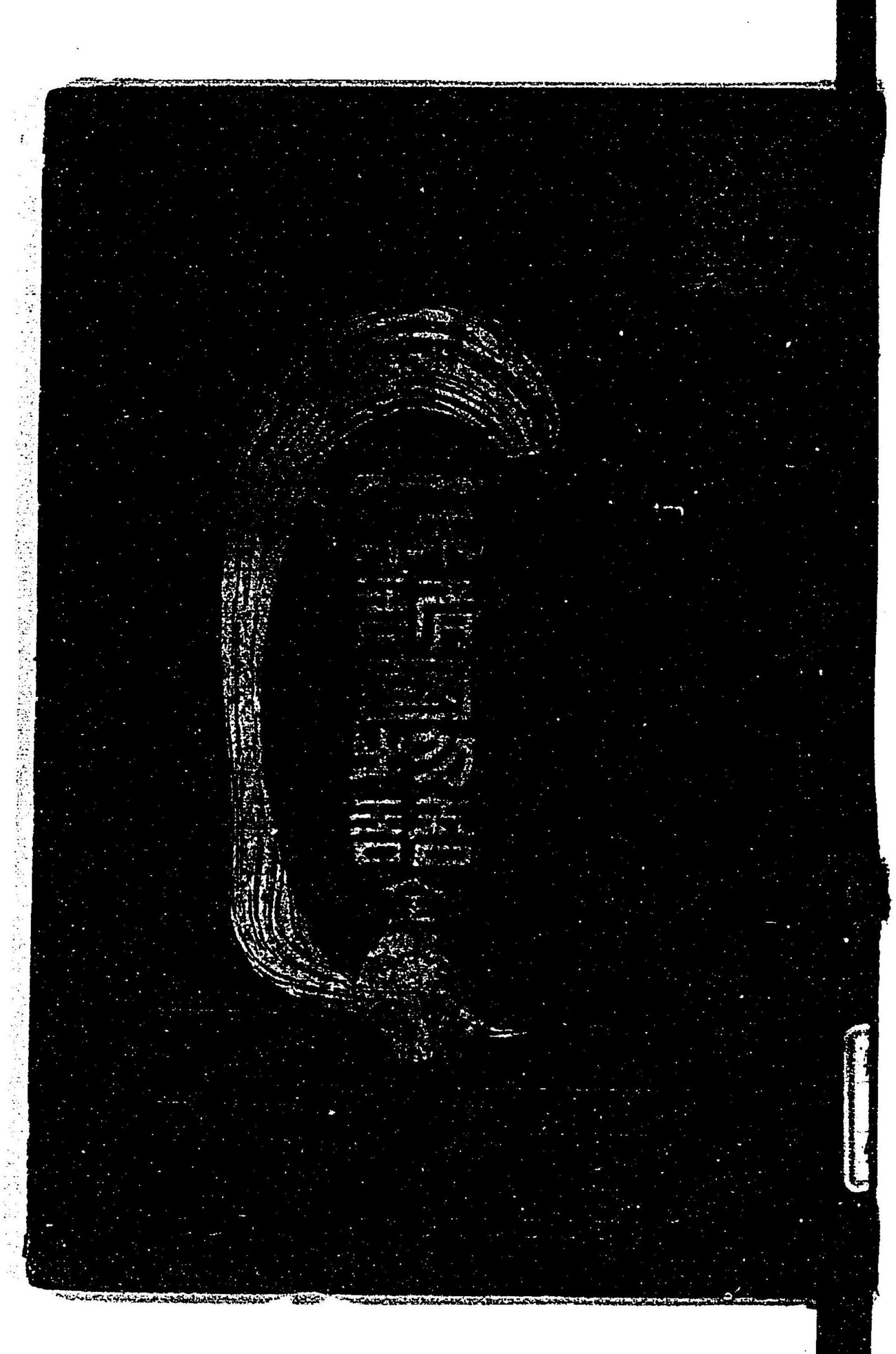
在のさうと申也うら國我朝にいたり上下貴賤佛道をねがふ事何宗かしうとて色々たてゝはありといへども其源はいづれも極樂じやうどゝいたり地獄ゝれとすまじきとの方便也此淨土といふは何國あれば我心のうちゝあり又地獄はいづれだなれば大事我心のうちゝあり或人達广大師にとふ地獄はいづれの所ぞやこたへていはく汝が心中ゝとんぢんちの三毒これなりとんぢんちとは貪い欲とく萬の愛念執着の欲を申あり慢とは腹をたつる念を申痴とはぐちとて何事も心のゆゝゝなき事をなげき歎じを我と見が心を惑ます事を申なり此三毒かくの如く善惡の報をつくり出し地獄ゝおつるなりぢごくとて別ゝ余の世界ゝある事にてはあらぢ又問極樂とはいづれのところぞやこたへていはく極樂淨土とて外にあるべからず汝が心中の三毒を拂ふ國すあはち淨土なり〻若紐ふ佛と衆生とへだて有事おし迷ひの衆生此とんぢんち我本心ゝてあき事をしらぢ一念あいし又ゝくむゝよりて地獄ゝれつなりこの三毒をもとゝして八萬四千のぼんなう發るありこれ則地獄なり佛といふもさとるといふも名ゝかゝれども同じ道也本心をさとる人をすなはち佛と名づくるありしかれば我心の外ゝ別に佛なき事をよく心得て此上ゝ常々こゝろゝかけ功工夫あらば道ゝ功あたりゝふゝん事うたがひあらべからず候現在の果を見て過去未來をしるとゝ經ゝとときおかれ候この心ゝ今こゝにて惡心惡逆をこゝ入ゝわすれずしてつゝしみ善事の心あつて取出し行ふ事也今此生ゝて其心をわすれぢば又今の心を未來へ引て人ゝ生をいたすべきとの事あり佛は万に自在を得たりといへども見あたらざる事あり一ゝは無緣の衆生及するとあたわず二ゝは衆生かいをつくる事あたはず三ゝはさうごう轉するとあたゝぢ前世のがうゐんにようかんとくしたる善惡のこつはうなりかやうの決定の業はうをば佛ばさつの身ゝても轉するとかなはぢ形の善惡福德の大小壽命の長短衆生の高低の事これら皆前世の業因ゝたえたる定業なり慈悲しんは福德の家ゝうまれ慳貪は貧苦の身いたり柔和ゝんゝくの心もあすがたよく生れさては高位高家ゝうまるゝなり殺生したるものは短命にうゝるゝかくのとくいづれもみな前世の惡ゐんゝより惡果ゝ得たる人このことはりをしりて今世ゝて惡行をつくらずば來世はかならず善果を得べき事唐土わが朝の祖師達をゝとめ數多き知識きのふみゝも皆殘し給ふ事どもをしめし參らす

明治廿年五月六日飜刻御届
同　年七月　出版

定價一圓五十錢

飜刻人　大阪府平民　石川正七
東區南久太郎町四丁目十五番地

發賣所　大阪心齋橋北詰壹番地　競爭屋



089870-000-0

特12-432

一休諸国物語図絵

平田　止水／編

M20

DBN-0145